



日本宣教ニュース

NO. 5 2015年7月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ1:6)

【巻頭言】

「神の国のためのデータ」

東京キリスト教学園理事長 廣瀬 薫

「日本宣教リサーチ」には、その前身となるC I S（教会インフォメーションサービス）の時代からお世話になって来ました。例えば、私が牧会していた教会が開拓伝道を始める時、当該地域の調査データを頂きました。私はそのデータを元に地図を作るなどして図化を行ない、教会員とのディスカッションの資料とし、開拓伝道地の選択や、伝道計画の立案において、大いに助けを得ました。

教会における宣教の働きにおいて、データというものは、得てして軽視されがちなもののように感じますが、実は大きな力となるものです。過去においてC I Sは、来日する宣教師たちの働きに多くのデータを提供して来ました。それは宣教師が行う開拓伝道などの働きを助けてきました。

今の時代、開拓伝道はもちろん大切ですが、さらに近年の宣教論の変化から、包括的な宣教と言われる方向性が強くなっています。例えば、マタイの福音書9章35節に「それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやされた。」とある、イエス様の宣教のなさり方を、①伝道と、②教育と、③福祉的奉仕の、3つの包括的な宣教のあり方と見て、私たちもそれに倣った広い視野をもって宣教に取り組もうとする方向です。あるいは、1974年の「ローザンヌ誓約」が「伝道と社会的責任」を掲げた事に習う方向です。これら全てを包含するのが、地上で「神の国」を担う本来の宣教です。

このような宣教を展開するために、データを色々な切り口から把握する事が、過去に増して重要となっています。かつての「伝道のためのデータ」から、今は「神の国のためのデータ」となっています。

そして、「神の国」が教団・教派を超えた性質を持っている以上、今求められるデータは、エキュメニカルな広がりを視野に置いたものとなっています。私は、日本キリスト教連合会の常任委員の一員ですが、そこでは福音派が、カトリック、聖公会、ルーテル、日本基督教団等と共に活動しています。今加わっていないのは東方正教会だけです。そこで接する情報からは、多くの刺激を受け、示唆を受け、私たちが得てして陥りがちな視野狭窄から解放される思いを味わっています。

「日本宣教リサーチ」の視野はエキュメニカルな広がりを持ち、『日本宣教ニュース』は、神の国の包括的な宣教活動に資する内容を持っています。広く活用されることを願っています。



【JMRレポート】

今回のJMRレポートとしては、「第5回 東日本宣教ネットワーク全体会議」での発題及び震災後岩手で開拓伝道をされている Dawn Birkner 宣教師に寄稿していただいた「地方開拓宣教セミナー」のレポートの抜粋を掲載いたします。

また、他宗教に関する情報を、今回も「中外日報」のオンライン情報から、一部抜粋して転載させていただきます。（記 柴田初男）

◆ 第5回 東日本宣教ネットワーク全体会議 ◆

1. 日 時：2015年5月26日（火）10:00～16:00
2. 場 所：仙台バプテスト神学校
3. 内 容：第一部 開会礼拝 吉永輝次師（勝田聖書教会牧師）
第二部 発題
①住吉英治師（日本同盟基督教団 勿来キリスト福音教会牧師）
“支援活動は福祉の一環である～共生＝共に生きる”
②稲垣久和師（東京基督教大学教授・国際キリスト教福祉学科長）
“福祉とキリストの恵み”
第三部 各県現状報告：岩手県、宮城県、福島県、茨城県
第四部 発題者を囲み、参加者の懇談の時
4. 参加者：約40名
5. 主 催：東日本宣教ネットワーク（代表 住吉英治師）

◇【住吉英治師の発題】 “支援活動は福祉の一環である～共生＝共に生きる”

- <これまで> ①福島にとどまった理由：イエス様が被災地の人々と共に生きていらっしやると確信したから。また、その時夫婦二人だけだったので。
- ②実際の支援活動：地域の人々に物資を差し上げる。体育館などに避難している方々への炊き出し、物資配給など。仮設住宅、借り上げ住宅の方々への支援など。
- <これからのこと> ①支援活動の神学的位置付けの必要：これを掘り下げ、確立することが今後の支援活動を継続していく大きな力となる。
- ②支援活動は福祉の一環である：物資配給、炊き出し等、すべてがその人の欠けを補うこと、つまり福祉の一環であることに行き着いた。
- ③宣教論との関わり：支援を続ける中で、これは宣教論、教会形成論であることを思わせられた。
- ④福祉の意味：その人を全人格的に支え、ケアし、共に歩み、そしてキリストに導く。
- ⑤具体的な提案：
- 第一に、心のケア：特に傾聴は大切。既存の宗教（仏教等）は無力で、希望を与えていない。ますます自殺者が増える。生きる希望がない、抛り所がない。
- 第二に、キリスト教精神に基づく総合病院の設置：聖書観による人間へのあらゆる面からのケア、治療、カウンセリング等の必要性
- 第三に、ホーム・施設の誘致・建設：キリスト教精神に基づく対応
- 第四に、企業の誘致などを含む仕事場の創出：いわきは企業が少なく、働く場所もあまりなく、生活に困窮している人が結構いる。
- 以上を含め、次の展開をしていくため「ハッピー・アイランド・フクシマ・プロジェクト」を立ち上げた。“福島に福音を” “福島に幸福を” “福島に福祉を” というビジョン。

◇【稲垣久和師の発題】 “福祉とキリストの恵み”

1. 聖書的視点から

①万物の主権者キリスト

- ・福祉というわざは「キリストの恵み」そのもの。キリストの恵みをいかに地域に生きる人々に及ぼしていくか。その役割、ミッションが私たち教会に委ねられている。
- ・キリストは万物の主権者であり、万物の和解者である。クリスチャンだけの主権者、クリスチャンだけのかしらなるキリストではない。これは、私たちがこれから、福祉を考えていくうえでも基本の「き」である。(コサ11:14-22)

②キリストのからだなる教会

- ・キリストのからだなる教会とは、有機体、生命体ということ。それがまさに教会ということの意味。しかも「比較的弱いとみられる器官がなくてはならない」とあるように弱い部分を含んでいる。これがからだなる教会の聖書的意味。(Iコリント12:12-31)

③エクレシアとは

- ・重要なのは聖霊によって生かされる生命体、有機体としてのエクレシア（教会）。しかし、歴史的に激動の時代を潜り抜けてきた教会は、聖霊によって生かされる自由な賜物に応じた有機体としての広がりと同時に、ある意味制度化されてきた。「制度としての教会」も現実として受け入れ、重んじる必要がある。それに応じて神学ができていく。そうでないと現代人の教会生活は成り立たない。
- ・いま我々が直面している支援、復興は、広い意味での福祉的な町づくり。こういうものを神学的な教会論の中で展開していくには、クリスチャン以外の人々も含んだ、コミュニティ論へとつなげていく必要がある。エクレシアとは本来、ギリシャ社会では民のコミュニティ、自由市民の集会のことだった。それは、ある目的に応じて民が集められる、しかしその仕事が終われば有機体というのは目的を終え、今度は別の有機体が出てくる。生きているというのはそういうこと。
- ・そういう可能性を秘めながら、かなり柔軟なかたちで有機体としての教会を考え、同時にまだ教会員にならない人達をも有機体として必ずや含む。いまの教会は会員制のクラブのようなどころがある。会員料を払わないとダメみたいな。しかし、この有機体の頭（かしら）は万物の主権者キリスト。牧師が頭ではないし、監督が頭でもない。

④共通恩恵

- ・聖霊の自由な働きによって様々な領域に、目的に応じてキリストの恵みが及ぼされていくというキリストの共通恩恵論。教会論が広がると同時に恩恵論が広がらないといけない。特別恩恵とは、キリストのバプテスマを受け、教会のメンバーとして制度としての教会の構成員になること。それに対して共通の恩恵は、広く教会の壁を越えて、有機体としてのエクレシア、民の集り、つまり地域コミュニティというかたちで及んでいる。
- ・地域に建てられている教会は、まさにコミュニティの中心として、その地域全般に対してキリストの恵みを伝えていく責任がある。それが宣教ということ。
- ・地域に建てられた教会が地域のエクレシアになる、と同時に地域をエクレシアにしていく。これは地域住民全体をキリスト者にしていくことではなくて、住民全体にキリストの恵みを及ぼしていく証人となること。そのミッションが私たちにある。

2. 福祉的視点から

①福祉とは何か

- ・福祉とは何か。人を支援していく、ニードのある人を助ける、人への自立支援。何らかの理由で自立できない人の生活支援、これが福祉である。
- ・福祉というのは、今日、ある意味で制度に置き換えられてしまっている。戦後憲法の「最低限度の生活を国が保証する」という生存権。そのために、社会福祉士とか介護福祉士、精神保健福祉士、臨床心理士等、色々な資格に基づいた専門職が立てられている。しかし、制度の中に取り込まれて動きが鈍くなったのがこれまでの福祉。

- ・1998年に出された社会福祉基礎構造改革で、40年以上続いたがんじがらめの規制が緩められた。それは、措置制度が終わって契約制度になったこと。契約制度になるということは、利用者が選択権を持ち、事業所との間に契約を結ぶ。従って、行政が背後に退く制度に変わり、関連行政の役所は厚労省から自治体の担当部署に移った。すなわち、国から地域に重心が移り、市民主権の時代となった。

②地域福祉の時代

- ・2000年に社会福祉事業法が改正された。重要なのは第4条。
 <社会福祉法第4条> 地域住民、社会福祉を目的とする事業を営む者及び社会福祉に関する活動を行う者は、相互に協力し、福祉サービスを必要とする地域住民が地域社会を構成する一員として日常生活を営み、社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会が与えられるように、地域福祉の推進に努めなければならない。
- ・福祉はニードのある人への自立支援であり、自立できるまでの支援である。いつまでも支援していると依存体質を作り、自立できなくなる。また役所、行政機関などと連携し、人が相互に支援できるような体制を作っていくことも地域福祉の目的。それを、コミュニティ・ワークとかコミュニティ・ケアと言う。まずは人と人が信頼し合える関係づくりが大事になる。従って、地域に建っている宗教施設は重要な意味を持つ。いや、重要な役割を果たすべき時代に入ったのである。
- ・福祉の法律の中で、特に、「地域」という言葉が重んじられている。教会も地域に建っているわけなので、この時代、地域にある教会は地域密着型で何らかの意味で地域福祉に参入すべきだと思う。地域の人々の幸福な生活のために祈る。今までは教会員のためにしか祈らなかったが、これからは地域の人々にもキリストの恵みが及ぶように祈る。会員制クラブを脱して地域の幸福形成（福祉）に参与する、それが地域からも期待されている。
- ・キリストの恵みと愛によって、相互に牧会的ケアをする人と人との関係が、地域にまで広がってコミュニティ・ケアとなる。教会は信仰的にリバイブして新しくされ、私たちがキリストの生き生きとした恵みを確認する中にその恵みを多くの人と分かち合う。そういうことが言葉だけではなく行いを通して、全人格を通して、人々のニードが必要なことをよく理解して、人々のニードに応える。全人格的に応える。その人が生きている、その人の生命、生活、生存、そのものを支援していく。それが福音に生きるということではないだろうか。
- ・マザー・テレサは、イエス・キリストの愛を万人に分かる形で見える化してくれた。言葉による宣教ではなくて、愛の行為による宣教。カトリック教会の長い伝統の中で養われた宣教の意味、そして聖書的な意味。言葉による宣教と同時に隣人を愛する愛の宣教として、私たちはこのマザーから学ぶべきである。

3. 結び — 地方の時代

- ・社会というコミュニティは必ず弱い部分を含んでいる。従って、それを社会的に包摂していく。それを福祉ではソーシャルインクルージョンと呼ぶが、もともとは聖書のエクレスシアの意味内容であった。
- ・そして非キリスト者にも働く共通恩恵。それは、日本の伝統的な相互扶助の考え方と通じるもので、日本各地の至る所に残っている。江戸時代には無尽講、頼母子講等と呼ばれ、村人は、必ず助け合いの組織を作った。これも共通恩恵の一つである。
- ・これらの組織は今でいうと共同組合的なもの。賀川豊彦はこれを利用した。大正期から昭和にかけて、全国に賀川豊彦の協同組合運動が広がった理由は、江戸時代以来の相互扶助の下地があったから。友愛と連帯による民衆の相互扶助、それが日本にある。これは宝だ。だから、そういう日本文化の中に育まれた共通の恩恵を用いながら、神の国の完成を旨として、キリストの御業を進めていく。それが今の私たちに課せられていることであると思う。

【文責：柴田 初男】

◆ 地方開拓宣教セミナー ◆

日 時： 2015年3月2日（月）～3日（火）

場 所：岡山県小島ロゴス英会話学院（夜の集会はユースホテル）

主催者：Rural Japan Church Planting Network（日本地方宣教ネットワーク：

rjcpn.upgjapanmissions.com）、JEMA Church Planting Institute（CPI）

参加者：20名（日本及びアメリカ、カナダ、Fiji, United Kingdom, Switzerland, France から日本で教会開拓を経験したことのある人々）

【プログラム】

- | | | | |
|--------|------------------|--------|----------------|
| セッション1 | 地方伝道の方法、ツール | セッション2 | 地方で救われた証し |
| セッション3 | 地方伝道のための祈りの時 | セッション4 | 地方開拓伝道のケーススタディ |
| セッション5 | 地方の奉仕者への励まし | セッション6 | ディスカッションと意見交換 |
| セッション7 | 地方伝道者のケア、都市からの応援 | | |

○ 地方宣教の現状：

- ・日本に教会がない地域は、全部人口が5万人以下の地方（1,800ヶ所）にある。合計3,400万人が地方に住んでいる。地方の3分の2は教会が一つもない地域で、3分の1は教会はあっても援助や助けが必要な教会。60年前から、宣教団・日本人伝道者・外国人宣教師はほとんど地方で働いていない。しかし、多くの教会がある都市では、数千人の働き人がいるというアンバランスな状態。

○ 私たちの世代の間に、どのようにして1,800の教会を開拓できるかについての意見：

- ① 都市と地方のパートナーシップ。都市の牧師と地方の牧師が友好関係を持つこと、都市にある教会は地方開拓リーダーのリクエストに応じて教会員を派遣すること、震災後行ったように、短期宣教チームを送ること、など。また、地方の教会がすでにある場合、元気に続けられるようにその教会や牧師を励まして応援すること。
- ② 信徒が教会やコミュニティに奉仕することが増えるように。信徒リーダーや教会を開拓する信者が増えるような訓練。
- ③ 各教派や宣教団体は、既に教会がある地域ではなく、教会がまだ一つもない地域の開拓を優先して行うこと。
- ④ 周辺の教会の超教派的な協力によって、一人のチャーチプラントリーダーは、1つの地方ではなく、教会がない5つの地方のクラスター（一団）の教会を同時に開拓することができる。1,800人のチャーチプラントリーダーではなく、300人で行うことができる。

○ 地方開拓宣教セミナーの参加者の中で出された意見：

- ① どこがまだ教会がない地域か知るためには、平成合併前の境界を使うことが大事。
- ③ 都会で使う教会開拓モデルをそのまま地方で使わずに、状況に合わせた色々なモデルからユニークな方法を組み合わせるほうがよい。
- ④ チャーチプラントリーダーは、20年位長い期間を忠実に続ける忍耐力が大事。
- ⑤ 地方では、中年層に対する宣教を必ず優先する必要がある。
- ⑥ コミュニティの所に行くか、或は人々を歓迎する魅力的な集会を開くか、その両方を同時に行うことが大きなプラスになる。信頼関係の中で福音を言葉で伝えること、コミュニティに奉仕すること、そしてキリストのような性格の三つがよいバランスをとることが大事。
- ⑦ 聖書を教えること、そして愛と受け入れ合って安心して交わることができる時間の両方を同時に持つことは、大きいプラスになる。
- ⑧ 開拓した教会が確立してから次の牧師に引き継ぐときは、チャーチプランターと次の牧師がオーバーラップする期間を長く持つほうがよい。

など、有益な話し合いと、心を合わせて祈るときが持たれました。 【文責：花蘭 征夫】

他宗教に関する新聞記事から 【2015年1月～2015年6月】

「沈黙破り活動広げる宗教者『死と再生の20年』シンポ」

阪神・淡路大震災とオウム真理教事件から今年で20年。日本宗教界と社会との関係が問われたこの時代を振り返り、今後の進むべき道を模索するシンポジウム「1995 - 2015 ニッポン宗教、死と再生の20年」が20日、大阪市天王寺区の浄土宗應典院で開かれ、宗教者ら4人が語り合った（應典院寺町倶楽部主催、中外日報社後援）。（梶恵順）

1995年の大震災で日本宗教界は「社会に対して何ができるのか」という大きな問いを投げ掛けられた。宗教学者の山折哲雄氏は当時、「宗教者は救援活動などを宗教家として立ち向かわず、市民ボランティアの一人として活動した。宗教者であることに自己沈黙したのだ」と発言し、彼らを震撼させた。

應典院の秋田光彦住職は、シンポジウムで「当時はまだ心のどこかでボランティア＝布教という気持ちがあった」と振り返り、「東日本大震災で日本の宗教界は変わったといわれるが、突然何かが変わったのではない。95年のものがきや絶望、何もできなかった無力感からの長い道のりがあった」と語った。

この20年は災害や貧困、自死、生命倫理や犯罪、葬送の変化など様々な社会問題が起き、それら多くの課題が宗教界との関係で議論されるとともに、宗教者の活動も広がりを見せていった。

第1部のプレゼンテーションでは4氏が20年を総括。共生・公共問題としての死、サードウェーブ、信仰の終焉などのキーワードが飛び出し、第2部のセッションではそれらを手掛かりに、次の20年を展望した。

1. 秋田光彦氏 SNS 通じた多様なつながり

【宗教と社会の協働】東日本大震災で宗教と社会の関係がリアルに問われた。これまでも宗教の社会貢献が言われ、近年では「宗教の公共性」をめぐる議論も起きている。ホームレスの方々の支援やグリーンケア、スピリチュアルケアなど。布教はせずに、傾聴と寄り添いという

地点から、新たな宗教者の役割が生み出されつつある。

【公共問題としての死】仏教の所管だと言われてきた死の問題や葬送に市民活動が参入してきた。少子化や単身化が進み家族が死後の問題を引き受けられなくなった。死が孤立する中、NPOが寺と協働して様々な供養を始めた。これは死の問題が「公共的な問題」として捉えられるということ。葬送の在り方の変化に伴い死が生前から問い直されるようになった。

【SNSと単独僧】今の20～30代の若い僧侶は既存の教団、組織、制度といった枠組みからは外れた別の視点で、「個の宗教者」として活動している。公共的な領域では傾聴や対話の“個人スキル”が求められるが彼らは孤独ではない。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を通じて、いろんな人とつながり、状況に応じて新たなネットワークをつくり出す。時には超宗派やNPOと連携して宗教活動の運営について議論している。私は彼らを“単独僧”と呼ぶ。

2. 稲場圭信氏 「共生できない」自利を利他に

【利他】これまで「利他」ということに関心を持って宗教者のボランティアやNGOなどを研究してきた。また、阪神・淡路大震災では、周囲の評価に関係なく救援活動に取り組む宗教者の姿に大きな感銘を受けた。

【チェンジ】テクノロジーや交通手段の発達、雇用形態の変化など、移動性の高い社会になり、継続的な人間関係が築きにくくなってきている。また、科学技術の発展により、IT犯罪や生命倫理など、社会問題も多様化した。2割未満だった単身世帯が3割になり、家族から個へと「シングル世代」に突入。従来の共同体が危機に瀕し、地縁・血縁・社縁も崩壊しつつある。

【共生】人種、国境、宗教などを超え、どう共生していくか。排他主義が世界的にも広がる中、「共生できない」という自己中心的な「自利」を、どのように「利他」に転換するかが問われている。人間的な苦を抱える「一人の人間」と向き合うとき、宗教者自身も苦を体験していないと応答できないと感じた。一人一人の状況に応じて話をし、同じ目線に立って相手の苦を受け止めていく。日頃からの寄り添いが大切だと思う。

3. 釈徹宗氏 中流崩壊し教育格差など深刻

【サードウェーブ】未来学者のアルビン・トフラーによると「人類は情報革命という第三の波」に入った。ネット社会が展開し、家にいながら世界に情報を発信、取得できるようになった。ウィキリークスのように巨大国家を揺るがす状況も起こり、ネット世界の評価が経済を大きく左右する。経済格差も広がり、今や世界の1%の人が全体の半分以上の収益を握る。日本では「1億総中流」と言われた時代が終わり、教育、医療などの格差が深刻になった。

【イスラム】この10年で日本のイスラム教徒の数は倍増した。5年後にはさらに倍になっていると思う。かつて少しずつキリスト教的な感覚を身に付けてきたように、日本人の宗教に対する感性がイスラムの影響で上書きされていく可能性がある。また注目すべきは「イスラム国」。我々の考えている国とは違い、領域を持たない信仰共同体なので、どんどん拡大していくと思う。

【近代成熟期】日本は成長期の方法では解決しない問題が噴出する成熟期に入った。経済の低成長、少子高齢化、うつ病、自死の増加、家族形態の変化、インフラを含めた制度疲労など。2005年あたりから我々の日常生活のあらゆる領域に企業モデルが侵入し、消費者体質が一気に進んだ。今後、宗教も消費財化する可能性がある。苦を解決するために必要な部分だけが求められ、制度化された宗教は「共感サービス」になる可能性がある。

4. 今岡達雄氏 800年も続いた信仰を忘れるな

【信仰の終焉】終焉とは「世の中から消えてなくなる」ということ。山折哲雄氏は「宗教は死んだ」と言ったが、死んだのは信仰だと思う。科学技術が私たちの生活の水準を上げたが、信仰に頼らずとも毎日を過ごせる人が大多数になった。信仰は、ある特定の人々の心の中だけに生きていくものになってしまった。

【宗教者の職業化】「信仰はないのに、なぜ宗教者がいるのか」。その質問に対して、宗教者は社会の役に立つ姿を見せることが課せられた。宗教者が社会に役立つ活動をするのは当たり前。しかし信仰の発露として貢献するのはいいが、役に立つことを目的にやると職業になる可能性がある。

【20/800】東日本大震災が起きた2011年は法然上人の800年御遠忌だった。この20年を考える時、一つの評価基準として「800年続いた信仰」を決して忘れてはいけない。今、世界は大きな転換点を迎えている。遺伝子操作技術と生殖医療が展開し、デザイナーベビー、「優れた人類をつくり出そう」ということが実際に起きている。クローン技術も人間に及ぶ可能性がある。法然上人の教えが800年続いたのは人類が続いてきたから。今、「その方向は間違っている」と声を上げないと、我々と同じ人類はいなくなってしまう可能性がある。

◆宗教と社会の関係と、そこにある宗教性

釈 日本宗教の一つの特徴は、社会に関わろうとする僧侶自身も「出家せずに苦悩しながら道を求めている」ということ。そこには、幾つかの条件や関係性が重なったその瞬間、その場所に立ち現れる虹のような宗教性があると思う。

秋田 その宗教性はイスラムにも通じる？

釈 今の日本では経済とか政治と同じようにカテゴリーとして宗教があると考えられている。しかし、イスラムは日常生活のあらゆる場面や行為がイスラム的に正しいか・正しくないか。我々の宗教性とは少し違う。

今岡 私たちも昔はそういう生き方を持っていた。それぞれの地域に定着する宗教が一つの信仰形態としてあって、生活そのものだった。心のコアを持って生きていくことが信仰ではないか。

秋田 今の時代、信仰は内面だけにとどまっていけないのだろうか。

稲場 自分自身だけを見つめて、社会的関係を断っていく在り方は危険。一時期、「自分探しの旅」というのがあったが、本当の自分や生き方というものは、他者との関わりの中に見つかるものだと思う。

今岡 社会で苦にある人は多い。宗教者はいつも「誰がどういう苦に陥っているのか」を理解し、探し、行動しなければいけない。結果的にその姿を見て「素晴らしい」と、宗教に興味を持ってくる人もいるかもしれないが。

稲場 葬儀のときなどに深まった感謝や、仏様を感じる心が継続しないのは、普段のプロセスがないから。日頃から丁寧に関係をつくって

る方もいるが、その関係性の中にこそ宗教はある。

秋田 例えば映画には長い前段のストーリーがある。いきなりラストシーンだけ抜き取ってもピンとこないということ。

今岡 かつて葬式仏教と言われ、「檀家があるからそれでいい」と言われていたが、それよりも「関係性を持つかどうか」の方が本当は重要だった。

◆超宗派の流れ

積 今、地縁、血縁は解体され「個対個」の関係性にシフトしている。宗教も個の活動にシフトしつつあるが、そうすると宗派や教団の意味はあるのだろうか。

今岡 「宗派でないといけないことは何か」が宗派の最大の検討事項。どんな問題に対しても、宗内には賛否両方ある。それをどう調整して、どう意思決定するかが、非常に難しい。結果は後にしか分からないので。

積 カトリックなどでは社会問題に対して積極的に発言している。発言すべきでないという立場もよく分かるが、宗派として社会に発言するリスクと責務を、伝統教団は背負うべきだ。

稲場 日本の仏教界は檀家制度のもと、あまりにも盤石な土台があったが故に、今でもその意識が強い。組織の中には社会に関わっていく意識をなかなか持てない人もいるのだろう。

秋田 應典院では、これまで「宗派を超えて仲良くしよう」という感じだったが、最近は「超宗派しかない」というようになってきた。ある僧侶は「ここは第二の教団です」と断言する。内には分からないことを、一度、外から見つめ直す。両方の視野を持つ動き方が当たり前になっている。

積 ここ数年、近代成熟期の生き方として、いろんなコミュニティーへの重所属を提案しているが、僧侶にもそういう方向があるかもしれない。歩む仏道の体系は浄土真宗としながらも、社会活動の回路としてNPOや超宗派にも所属するような。

◆宗教のこれから

今岡 宗教者の基本的な行動として「悲しみや苦しみの当事者といかに接触できるか」がある。その視点は災害時でも同じだが、日常の中でも寄り添える方向に動くべきだと思う。

稲場 大学にいて思うのは、今の学生は非常に堅実だということ。経済停滞の中で生きている

ので、地に足が着いている。そういった人たちが新しい社会をつくっていく。私たちは、足を引っ張らないようにしないといけない。

積 1・17 で受けた衝撃が今の活動につながっている人は多い。それが 3・11 の機動力や取り組みという形で花咲いた部分がある。今の取り組みが数十年後に花咲くこともあり得る。それぞれが宗教者としての立ち位置を探り、苦悩する中に、社会との関わりの道筋ができてくるのではないだろうか。 (中外日報 1 月 28 日付一部抜粋)

「心豊かに暮らせる老後を 地域介護に生かす宗教の力」

4 人に 1 人が 65 歳以上の時代を迎え、10 年後には団塊の世代が 75 歳以上になり、超高齢化社会が到来する。介護や生活支援を必要とする高齢者は、この 10 年間で倍近くに急増し、高齢者の 6 人に 1 人が介護保険の利用者になっている。住み慣れた地域社会の中で、高齢者が心豊かに暮らしていくために、宗教に何ができるのか。寺院の施設や NPO 法人では、介護の現場で宗教の力を見直しつつ、地元根付いた取り組みを模索している。(萩原典吉)

三重県桑名市の大山田ニュータウンにある特別養護老人ホーム・長寿苑では毎日午前 10 時 15 分から、施設内の仏間で仏参がある。臨済宗妙心寺派長壽院寺族で副施設長の加藤光貴氏 (29) は「認知症で普段は話せない人や対話にならない人も、お経だけは唱えることができる。仏参には意外な力があると感じている」と話す。同苑の入所者は特養が 80 人で、入所待ちの待機者が約 250 人。他にショートステイ 20 人と定員 20 人のデイサービスを行っている。入所時には家族に、最期を迎えたときは看取りを行うか、それとも病院へ送るかを尋ねるが、9 割が施設内の看取りを希望するという。

厚労省は 4 月から特養における介護報酬の看取り介護加算を強化し、看取り介護を促進している。加藤副施設長も「高齢者が増える中、我々にとって経営的な必要性もあるが、それ以上に社会的責任として看取りがますます必要になってくる」と国の方針には理解を示しつつも、「看取りに対する職員の考え方や教育が追い付いていない」と指摘する。

目の前に、もはや食事もできない、水も飲めない人がいる。そのときはどうしたらよいのか、職員にも葛藤がある。だが「利用者さんの仏事に対する反応を見ていると、宗教の力は大きい。これから看取りの場面に直面した職員や家族さんのフォローにも、宗教の力が生かせるのではないかと期待する。

同苑に勤務して 15 年目の家田真由美さん（40 歳代）は「看取りの後に施設からお送りする時、可能な限り職員全員が並んでお見送りすることは、以前勤めていた特養では無かったし、他ではあまりしていない。慈悲の心を大切にしている施設だと思う」と話す。

長寿苑は、加藤副施設長の祖父の故加藤知宏・長壽院先住職が 1984 年に開苑した。地域のニュータウンの開発も同じように 30 年ほど前から始まり、当初はまばらだった住宅が今は密集している。同苑も地域と共に歩んできたが、これからは地域に開かれた施設になることが課題という。

加藤副施設長は「介護施設はどうしても住民から敬遠されがち。だが地域の人々の高齢化が進んでおり、施設内の看取りへの対応ばかりでなく、どうすれば地域に貢献できるかを考えなくてはならない」と話す。

そこで始めたのが、毎月第 1 日曜日の「長寿苑カフェ」で、周辺の住宅一軒一軒にチラシを配って参加を呼び掛けた。最近では来場者も増え、行政も住民に案内してくれるようになった。また毎年 1 回、利用者の家族の交流会では屋台やバザーを出し、長壽院が運営する保育園の園児も集い、地域の人々にも参加を呼び掛けている。

加藤副施設長は「これらの事業を通して、初めてここに入ったという人もいるし、いずれは両親が世話にならないといけなから来てみたという人もいる。今後はカフェだけでなく法話も取り入れるなどして、地域とのつながりを考えていきたい」と話している。

つながって笑顔で死を見つめたい 地域の拠点にお寺を活用

地域社会の中で、どう高齢化に対応していくか、手探りの状態ながら新たな取り組みを始めた寺院もある。そこには従来の檀家制を超えた高齢者同士のつながりもできつつある。

○介護ベッドを本堂に、誰も排除せず共に生きる

富山県魚津市の中心街にある真宗大谷派専正寺の本堂には、2 台の介護ベッドが置かれている。本堂の裏側には大部屋があり、高齢者とスタッフの約 30 人が歓談している。

毎日午前 9 時から午後 5 時まで、日曜日を除いて開所する「宗教法人専正寺デイサービスまごころ」がスタートして 11 年が過ぎた。週 3 回訪れ

る利用者の宮田由美子さん（72）は「ここに来て、皆の顔を見ると元気になれる」と話す。

利用者の平均年齢は 80 歳代後半で、その 8 割は認知症。元教員の女性は、卒業・入学式のシーズンになると「学校に行く」と、そわそわし始める。ヘルパーの資格を持つ久津谷俊行住職（65）は「それを否定するのではなく、『そうですね』と共感し、『一緒に行くので、しばらく待ってください』と安心感を提供すれば、本人が落ち着きを取り戻すことを学んだ」と話す。同寺の取り組みは「富山型デイサービス」と呼ばれる様式。高齢者、障がい者、子どもなど、対象者を限定せずに在宅サービスを提供する。特別なプログラムを設けず、日常の介護に力を入れる。現在「富山型」の事業所は同県内に 115 あり、運営主体が宗教法人のケースは 3 カ所（いずれも真宗寺院）ある。

戦後開基された同寺は檀家が無く、久津谷住職は地元の短大で事務員を兼職していた。その短大が閉校になり、もっと人が集まるお寺にしたいと思っていた時、「富山型」提唱者の元看護師・惣万佳代子さんの講演を聴いて衝撃を受けた。

「介護施設といえば上から目線で利用者へ施すイメージを持っていたが、そうではなかった。見た目には利用者が介護を受けているように見えるかもしれないが、誰も排除せず、日常を大切に共に生きる在り方は、これからの社会の在り方にとっても、大きな可能性を秘めていると思う」

開所時からのスタッフで、以前は地元の社会福祉協議会で働いていた林文子さん（68）は「一般的に施設はフローリングが多いが、お寺は畳の部屋があるのが良い。ここに来ると、皆と心から話ができる気がする」と話す。

当初は様々な利用者がいるため宗教的な行為は避けていたが、利用者自身が「ここはお寺ですよ

ね」と興味を持ち始めたこともあり、今では月・水・金曜日にお勤めと法話を行っている。

久津谷住職は「ここに来る人は家族との折り合いが悪く、叱られたり、自分の言葉を否定されたり、つらい思いをしている人がほとんど。心が満たされる接し方が大切だと思う」と強調する。

現在、50メートルほど離れた中古住宅を購入し、リフォームして二つ目の事業所を開く準備を進めている。久津谷住職は「今は介護が必要なくても、独り暮らしで話し相手がいない人が増えている。そういう人が集まり、また手芸品や農作物を販売できるような場所になればと思う」と語った。

「瞬間瞬間をいかに輝かせるか」

春名苗・花園大教授

高齢者福祉が専門の春名苗・花園大教授は「高齢者に接するとき、一人一人その人が生きてきた過去や人間関係を知ることが大切。家族や地域との関係はどうだったのか、何が好きで、どんなことに興味を持っていたのかなど、今の生活に至るまでの経緯からその人の現在の状況を知り、またこれからどうしたいのかと時間軸でその人を理解し、支援をしていくことが必要。その延長線上に死を見つめていくことになるが、生きているその瞬間瞬間を、いかに輝かせるかを追求していかなければならないだろう」と話す。

宗教法人や僧侶が行う高齢者福祉については「その宗教が持つ理念を、一人一人の高齢者に対して、どう具体化させていくかが課題だろう。その人をどう見るか、その人にどう接するかは、宗教の理念の追求にも関わることであり、宗教法人が施設や地域で福祉活動に携わる意味も、そこにあるのではないかと指摘している。

(中外日報5月13日付一部抜粋)



参 考 記 事

◇ インタビュー:文明批評の発言が目目される

精神科医・作家 野田正彰さん(70)

宗教は国家と違う発想持て

「仏教一つ見ても、親鸞も、道元も、全然他の仏教圏に知られていない。それはディスカッションしていないからですよ」。われわれの思考が、日本という枠組みの中で止まっているのはなぜか。宗教に期待しつつ、その問題点を指摘する。

○ 宗教者に対するご発言も多いようですが、どのような宗教観を持っておられますか。

野田 既存の言葉だったら、何というか、「汎神論」に近いのかもしれませんが。世界宗教の神といえども、神は全て同じものを指しているという考え方ですね。イスラムの神も、キリスト教の神も、ユダヤの神も、結局人間が同じものを見ているという発想。またアニミズムは、世界宗教と対極にあると思われていますが、絶対的な神が同じものという考え方と、無数に神がるという考え方は、通底していると思う。

私は、宗教というのは、個人と人間社会の在り方について、一つの規範を与えているものだと思います。こう言うと宗教者から怒られるかもしれないが、人間は万物の霊長という面もあるけれど、最も下劣な動物でもあると思う。つまり残忍で、盛んに“共食い”する「猿」です。人間は脳を発達させたから、「いかに生きるか」をいつも考えないといけない。そこに悪の生き方とか、歪んだ願望とか、いっぱいゴミのように入ってくる。それに振り回されながら、私たちは生きている。でも、そうあってほしくないから、諸宗教が人間の生き方を提示している。例えば、仏陀の時代は一つの部族が大きくなり、盛んに戦争を繰り返した。そういう中で、悲惨さをつぶさに見て、執着から争いが起きていることを解き明かし、「正しく生きなさい」と八正道を説いたのが仏陀でしょう。だから悟りとは、到達点ではなく、日々の生き方を語っているわけですよ。

制度「いかに不幸にするか」分析を

○ 文明史的にこの日本というものを考えた場合はどうでしょうか。

野田 日本の特性は、孤立した島国であることを忘れてはいけない。それが良かった面もあるが、マイナス面が大きい。

例えば天皇制のような特殊な社会システムを温存できたのは、島国だからです。近代の100年にわたり、歪んだ形で西洋など5カ国くらいをモデルに覇権国家を造ろうとして、むちゃなことをやって敗戦を迎えた。それで私たちは大きな教訓を得ましたが、70年もたつと、その教訓が薄らいできた。ヨーロッパの国だったら、周りの人たちといろんな摩擦を起こしながらも、コミュニケーションして生きているから、こんなことにはならない。日本の特質は、朝から晩まで「日本では」と言っている。例えば同業種の中で、自分の会社が日本一だとか、日本で何番目の市場を持つとか。自分たちが限定された社会の中で生きるように、文化的バイアスがかかっている。私はいろんな世界を回ったけれど、そういう発想で生きている人たちは他にないですよ。結局、海外に行っても金魚鉢に入って旅行しているようなものですよ。コミュニケーションしていませんから。

○ それは宗教の在り方にも関わっていますか。

野田 アメリカで布教しても、アメリカに渡った日本人を中心にして。相手の事も知らずとしない。例えば自分たちが戦前・戦中にアジアでどんな布教をし、どんな問題があったかを研究していない。相手の事を知って、自分の事も伝えることが「会話」です。そのディスカッションがない。

○ 日本という枠組みの中でしか、物事を考えていないのでしょうか。

野田 どんな社会でも既存のものを保持しようとするし、保持しようとしても壊される。島国でなかったら、もっと日々壊されたり、つくり替えられたりするし、そうなることが現実だという認識がある。でも日本は狭い社会だから、守ろうとしたらかなり守れる。狭い社会は精神病理学の用語を使うと、ある意味で強迫的な精神状態にあります。狭いから、きちんと完全なものをつくることができる。大きな社会では細部にこだわるよりも、本質とは何か、が常に問われる。

私は、日本人には強迫文化が似合っていると思う。狭い範囲で生きているから、きちんとやろうと。清潔好きもそうですね。狭い範囲だから清潔

にできる。でも確かに家はきれいにしていることが多いけれど、家の周りは使い古した物を整理せずに置いている。ヨーロッパの農家を見ると、景観が日本よりも整っています。

日本人は、自分の範囲を決めて、そこできちんとやろうという志向が常に強い。何が本質かを考えることをしなくてもいいし、狭い範囲できちんとした形式を整えると満足する。

○ 本質を考えることがなくなっている。

野田 立派な形式がいっぱいありますから。例えば仏教における修行もそうでしょう。きちんとした形式があって、それに向けて他を排して専念するのは、気持ちいいことだし、自分が磨かれたような思いになるでしょう。でも、それだけでは仏陀がなぜ出てきたのか、何を説いたかが問題になってこない。

○ 形式を受け継ぐことは必要でしょうか。

野田 人間の事象だから、本質を問うことと、形式を守ることの両面があります。ただ私たちは地政学的に島国だから、形式だけで満足できる環境にあるということです。

○ むしろ自分からそういう枠を取り払って、海外の人たちときちんと対話することが必要ということですか。

野田 そうです。相手のことを知らないといけないし、自分の考えていることを一生懸命伝える会話が必要でしょう。敗戦直後は戦争の反省があったから、「人間とは」と皆が考えたと思う。今はそうじゃなくなっている。日本以外の人と、心から会話することが減っている。ニューヨークに行っても、音楽とか技術とか、消費文化だけを身に付けて帰ってくる。アメリカ社会が持つ矛盾とか、ほとんど知らないし、会話もしていない。

○ 現在の仏教界、宗教界に対してどのような意見を持っていますか。

野田 まず、現在やっていることをきちんと保守してほしい。私はいろんな所で言っていますが、宗教は国家よりも古い。人間の在り方を問いつけた宗教があり、そのもとに宗教教団ができ、形式がつくられた。国家は後ですよ。国家は宗教をモデルにして、宗教を利用しながら造られた。だから国家に単一化された国家主義になってはいけない。国家と違う発想で、社会の在り方を問うセクターを持つことは、私たちの社会で最も望ましいことです。

各新聞記事から
【2015年4月～6月】

カトリック新聞、キリスト新聞、
クリスチャン新聞

4月

◇KGKが聖書研修会「NET」開催 学生たちが寝食共に学び深める

キリスト者学生会（KGK）は、3月2～7日にかけて、全国規模の聖書研修会「NET (National Evangelical students Training)」を国立オリンピック記念青少年総合センターで開催した。全国から215人の大学・専門学校生、約20人の卒業生が参加した。

NETは2014年に始められ、今年で2回目。これまで開催されていた小規模の全国リーダー訓練会が母体となり、NETと名称を変更し規模を拡大した。また参加回数に応じて、学びのプログラムが更新される「ストランド制」を導入し、学生が4年間をかけて学びを深められるシステムに変更した。

NETでは、初参加のためのストランド1とストランド1経験者のためのストランド2のプログラムが用意され、参加学生はそれぞれのストランドに分かれ、約1週間、寝食を共にしながら学びを深めた。
(キ4日、ク5日付)

◇賀川思想の現代的意義問う

大震災以後の教会と社会を、賀川豊彦ならばどのように評するだろうか。「21世紀に蘇る賀川豊彦・ハル」と題するシンポジウムが3月14日、明治学院大学白金校舎で行われた。米テンブルトン財団の助成事業で、東京基督教大学共立基督教研究所と明治学院大学キリスト教研究所による共催。全国から賀川の孫、その事業に縁故ある人々、研究者ら約100人が集った。

(キ4日付)

カトリック新聞(4月5日)

◇名古屋教区に新司教 教皇、松浦司教を任命

◇わすれない 復興支援の現場から 宮城・南三陸その網 捨てられるのか! ?、◇ 教皇、書簡発表し呼び掛け 全世界で死刑廃止を、◇ 潜伏キリシタン称

お寺はいろんな歴史を背負い、江戸時代の檀家制度で、キリスト教の強圧と管理のための宗教になった歴史はあるけれど、お寺さんが地域社会の中で一つのよりどころになっているのは良いことだと思う。キリスト教も、たとえ武士道的キリスト教で限界はあっても、誠実に生きようとする多数の人を教会に集めてきた。それを保守しながら、同時にそれぞれの宗教を切り開いた人たちが何を見つめていたのかを踏まえて、自分たちも前に一步踏み出してもらいたい。

それと宗祖の中にある限界も見ないといけない。例えば、空海は今の仏教者以上に国際的視点を持っていました。中国に行って、中国仏教の先端の中でインド仏教を学ぼうとした。しかしそれでも、その範囲ですよ。それ以上のものを要求するのは酷かもしれないけれど。まして、親鸞は当時の翻訳された仏教経典の中で考え抜いた人ですよ。考え抜いて優れたものを出しているけれど、やはり後世の私たちの時代は、その限界を指摘しながら、現代に関わる宗教の視点をつくっていかないといけない。

○ 宗教界に期待する面はどうでしょう。

野田 宗教者は人々の在り方、つまり関係性が、いかに人間を不幸にするか、宗教の視点からきちんと発言しないといけないと思う。

「戦争反対」を言うことはもちろん大事だけど、もっと現実をよく見て、制度や政策が私たちをいかに不幸にしているかを分析して、語ってほしいですね。何か非常にステレオタイプの言葉だけで語っているところがあって、日々起きていることにつなげることが十分にできていないように思います。いかにして成熟して、老いていくかとか、仏教が語ることはいっぱいありますよ。仏教は老いや死についてずっと語ってきたし、高齢化社会の中で、もっと言えることは多い。仏陀は、当時では珍しいほど高齢を生きたわけですよ。それができたのは、彼が八正道を生きていたからでしょう。もちろん病気になるなかった面もある。仏教は高齢化社会の中で、老いの成熟をちゃんと語れるはずなのに、今はそれができていると思えないのが残念です。

(中外日報2014年11月
5日付抜粋)

【文責：柴田 初男】



賛 教皇、日本の司教らに語る、◇ 司教団、教皇と 会談 7年ぶりのアド・リミナ

◇「秘密保護法撤廃」を牧師ら 国会議員に直接要請

2013年12月6日に「特定秘密保護法」が可決・成立して以降、同法の撤回を求め、情報発信や政府・国会への働きかけをしてきた「特定秘密保護法に反対する牧師の会」（共同代表／朝岡勝＝同盟基督・徳丸町キリスト教会牧師、安海和宣＝単立・東京めぐみ教会牧師）は3月20日、「秘密保護法」撤廃・「集団的自衛権行使容認」法整備を行わないことを求める政府要請・国会議員要請をした。（ク5日、キ11日付）

◇向谷地生良氏 教会も「当事者研究」を 地域に 仕え “共に歩む、道模索 「教会と地域福祉」フォー ラム21 第3回シンポ

教会と地域の連携を図り、キリスト教福祉の再興を模索する「教会と地域福祉」フォーラム21の第3回シンポジウムが3月28日、日基教団霊南坂教会（東京都港区）で開かれた。これまで高齢者福祉、児童福祉をテーマとしてきたが、今回は「地域の悩みを教会の悩みに—— “共に歩む、教会の形成を」をテーマに、精神保健福祉に携わる施設関係者や学生、牧師、信徒ら約100人が集まった（キリスト新聞社、東京基督教大学共立基督教研究所共催）。（キ11日、ク12日付）

◇福島クリスチャン県人会初顔合わせ

東日本大震災から4年を越え、被災地域の県内在住者と県外在住者の交流を深め祈り合っていると、3月28日、お茶の水クリスチャン・センターで「被災3県を愛する集会」と「福島クリスチャン県人会」の初顔合わせが行われた。震災以来、福島県郡山市を拠点に支援と宣教の働きを続けている福島ミッションセンターの三箇義生事務局長が発案、クリスチャン都道府県人会（長谷川与志充代表）の協力を得て実現した。福島をはじめ東北の被災各県に関わりのある20人余りが集まった。（ク12日付）

カトリック新聞(4月12日)

◇教皇フランシスコ 復活祭メッセージ 復活理解の鍵は謙遜、◇ 教皇 聖木曜日に刑務所を訪問 男女12人の足を洗う、◇ 国際カリタスも主催 国連防災世界会議の併催企画、◇ 性暴力問題考える 女子

高校生ら参加し「会議」、◇ 原発避難者 窮地に 住宅の無償提供期限も迫る 「事故」後、福島そして全国へ

◇日本ルーテル教団 子どもたちに福音伝えるため 絵本『しんこうってなに？』を手作り

「礼拝はたまに行けばいいの？」「どんなことでもお祈りしていいの？」——教会や信仰に関するこうした素朴な疑問に「シャポー」というキャラクターが応答する絵本『しんこうってなに？』を、日本ルーテル教団「教会だより」編集委員会が発行した。マルティン・ルターの「小教理問答」は、子どもからの問いかけに親が答える形で書かれているが、宗教改革500年を目前に、子どもからの問いに子どもが答えるという形の「信仰問答」の絵本が作られたことに、「こんな本は今までなかった」「こんな本が欲しかった」との反響が同委員会に寄せられている。（キ18日付）

◇ “平和のしるし、として歩む 日本聖公会主教会 が戦後70年メッセージ

日本聖公会主教会は、「“戦後70年、に当たって”と題するメッセージを4月5日付で管区事務所ホームページに公表した。

〈はじめに〉では、今年がアジア・太平洋戦争が終結してから70年に当たることについて、「わたしたちはこの戦争で犠牲になった人々、また、今もその痛みや苦しみ、悲しみの中にある人々のために祈ると共に、世界の平和に向けての日本聖公会のあるべき姿を改めて確認したい」との思いを表明。

続く〈日本聖公会の戦争責任〉において、1995年に「日本聖公会の宣教—歴史への責任と21世紀への展望」の主題のもと、「日本聖公会宣教協議会」が開かれたこと、また翌年開催の第49（定期）総会で、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言を決議する件」が採択されたことを想起。「南北朝鮮の平和統一を含む東アジア全体の平和と和解、そして、沖縄における平和の確立は今後とも日本聖公会の宣教活動の大事な課題であり続ける」として、その実現のため努力を続けていくことを表明した。

また、〈東日本大震災と2012年宣教協議会〉の項では、12年9月に日本聖公会宣教協議会が開催され、「日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉

提言」が出されたことに言及した。

その上で、〈これからの日本聖公会のありかた〉の項目では、日本の再軍事化への動きが加速されていることに伴い、沖縄米軍基地の固定化、韓国、中国との関係の悪化など、平和や安定が脅かされる状況が生まれつつあることを危惧。福島第一原発事故による放射能汚染、経済的格差の拡大、ヘイトクライム・ヘイトスピーチによる人権侵害などを挙げ、「そのような状況であるからこそ、戦後70年を迎えたわたしたちは、これまでの歴史から、また主イエスの福音から学び、いのちを輝かせる働き、隔ての壁を取り除き、分かたれたものを一つにする平和の器として歩いて行く思いを新たにします」と訴えた。

そして最後に〈平和のしるし・和解の器として〉において、「わたしたちは日本社会の中にあって小さな群れです。しかし主キリストにあって一つであること、そして、いのちを尊び、祝福しあう共同体として、共に礼拝し、仕え、歩むことで、それぞれの地域での「平和のしるし」となることができるのです」と強調した。

(キ18日付)

◇ 国境・民族を超えた、杉原千畝、清水安三、田内千鶴子の物語をDVD化

戦後70年の今年、国境、民族を超えて20世紀の動乱を生きた3人の日本人キリスト者を扱ったDVDが完成した。DVDは「キリスト教的新発見！『目からうろこ』シリーズ Vol.6『激動の20世紀を生きた三人のクリスチャン』だ。4月6日、完成披露試写会がいのちのことば社本社で開かれ、3人の子、孫ら遺族や関係者らが、初めて一堂に会し、思い出や今に生きる3人の活動について述べた。

3人とは、第二次大戦下のリトアニアで、ユダヤ避難民六千人を救った命のビザを発行し続けた杉原千畝、第一次世界大戦中、宣教師として中国に渡り、虐げられた子どもたちを助け、後に桜美林学園を創設する清水安三、韓国孤児三千人の母、田内千鶴子だ。

(ク19日、キ25日付)

◇ エデンの園から新天新地をメシアニックジューの視点で 第6回再臨待望聖会

「第6回再臨待望聖会」（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ主催）が、3月14日から28日まで、

沖縄、札幌、大阪、名古屋、東京で開催。のべ千641人が参加した。ゲスト講師はメシアニックジューでユダヤ人伝道団体「メッセンジャーズ・オブ・ザ・ニューカベナント」代表のモッテル・バルストン氏。ウェスレアン・淀橋教会で開かれた本大会では、エデンの園から新天新地までを俯瞰し、時代に対する神の計画と聖書的契約について語った。（ク19日付）

◇ 次世代へ希望の祈り 佐藤氏、近藤氏、朝岡氏語る SALT&LIGHT

超教派の次世代の祈りのカンファレンス、SALT&LIGHTカンファレンスが、3月28日、東京世田谷区の日本基督教団頌栄教会で開かれた。

東日本大震災後、毎週開かれた祈禱会「キンパチ」のディレクター、田所慈郎さん（ミュージックLIVE ミニストリーService Areaディレクター）が呼びかけた。ゲストは、3.11いわて教会ネットワーク代表の近藤愛哉さん（保守バプ・同盟 盛岡聖書バプテスト教会牧師）、佐藤彰さん（保守バプ・福島第一聖書バプテスト教会牧師）、日本同盟基督教団震災復興支援本部事務局長を務めた朝岡勝さん（同盟基督教団 徳丸町教会牧師）。賛美リードはゴスペルシンガーの横山大輔さん。被災地、日本の教会の現状や課題、10年、20年後の次世代のための祈りを共有した。（ク19日付）

カトリック新聞(4月19日)

◇ いくしみの特別聖年 教皇、大勅書で公布 癒やしと助け、和解の時に、◇ ケニア司教団 大学襲撃事件受け 市民に一致呼び掛ける、◇ 1年で12万人増 韓国のカトリック信者、◇ 米国の教区審理費用無料に 婚姻の無効宣言、◇ 教会ボランティア拠点 高校吹奏楽部員と共演 福島・原町ベース

◇ 福祉・教育・教会のネットワーク作り 人材育成が急務 講師、パネリストらが意識共有 第1回サポートネットワークシンポ

社会福祉法人キングス・ガーデン東京（泉田昭理事長）は、キリスト教社会福祉の理念による福祉・教育・教会のネットワークを作る足がかりとして、第1回サポートネットワークシンポジウムを5月30日、日本イエス・キリスト教団荻窪栄光教会で開催する。これに先立ち4月14日、

5月

講師の市川一宏氏（ルーテル学院大学前学長）をはじめ、パネリストらが練馬キングス・ガーデン（東京都練馬区）に集まり、問題意識を共有するための座談会を行った。（キ25日付）

◇「CS 教師セミナー2015」で西村敬憲氏「少ないからこそチャンス！」

「CS 教師セミナー2015」（いのちのこことば社CS成長センター主催）が4月15日、お茶の水クリスチャン・センターで開催。西村敬憲氏（同盟基督・西大寺キリスト教会牧師）が、「『見直そう教会学校！』～教会学校教師のための知恵～」と題して講演した。

「人数が少ないということは、むしろチャンス。CSは人数は全然関係ありません…」当日、西村氏が繰り返し述べ、強調した点だ。その理由は、次の通り。「少人数個別教育の時代から考えると、CSで子どもが少ないのは、実は人間を育てていくチャンスの時代なのです。学校、予備校のポスターのキャッチフレーズは、ほとんどが個別指導。だから、少なくなったと言わないほうがいい。じっくりと育てていける時代だと受け止めるべきです」。（ク26日付）

◇日本同盟基督教団セクハラ相談窓口開設 秋から運用

日本同盟基督教団は、教団内のセクシュアルハラスメント問題に対応するためにセクハラ相談窓口を設置することを、第66回教団総会（3月17～18日）において、賛成多数により可決承認した。今後セクハラ防止相談委員会（以下、委員会）が新たに立ち上げられ、準備が整い次第、相談窓口の業務がこの秋にも開始される予定。なお相談窓口を利用できるのは同教団の教職と信徒、およびその関係者となる。

（ク26日付）

カトリック新聞(4月26日)

◇アルメニア人「虐殺」100年 教皇の表現にトルコ政府反発、◇「世界召命祈願の日」メッセージ「約束の地」への脱出、◇日本カトリック・ボランティア連絡協議会 総会・宮城大会 希望持てない子どもたち 被災地に限らず、全国で異変、◇東北被災地ベース担当者ら集まる 活動の課題 共有、◇主教会がメッセージ 日本聖公会 戦後70年で

◇ムスリムと日本の宗教者が対話 宗教間の相互理解と和解を目指す 世界イスラーム連盟・WCRP日本委共催

イスラームの名を悪用した過激派組織による暴力や武力行使が世界各地で起こり、アジアにおいてもムスリムと仏教徒の対立や紛争が生じる中、諸宗教間の対話を通じた相互理解の促進と、和解に向けた協働が喫緊の課題だとして、「ムスリムと日本の宗教者との対話プログラム」が4月9～10日、六本木のグランドハイアット東京で開催された。総合テーマは「平和のための共通のヴィジョンを求めて」。7カ国27人の海外参加者を含め、日本の宗教者、各国駐日大使など、約300人が参加した。（キ2日付）

◇第19回開拓伝道セミナー開催

開拓伝道する教会と牧師たちを支援し続けている国内開拓伝道会（KDK、泉田昭会長）が、第19回開拓伝道セミナーを4月20日開催した。会場は国立オリンピック記念青少年総合センター。21日の夕方まで、開会、閉会の礼拝を挟んで、3回の講演と、分科会がもたれた。主講師は、中島秀一（日本イエス・荻窪栄光教会牧師）、福井誠（バプ教会連合・玉川キリスト教会牧師）の各氏。セミナーには開拓伝道中のみならず、開拓伝道に重荷を持つ教職者や信徒など、46人が参加した。（ク3日付）

カトリック新聞(5月3日)

◇信仰故(ゆえ)の虐殺多発 教皇 今日の教会は「殉教者の教会」、◇世界広報の日 2015年5月10日 教皇メッセージ家庭で学ぶコミュニケーション、◇結婚、家庭の名誉回復を 教皇「不信」の文化に警告発す、◇仏教徒に共闘訴え バチカン 現代の奴隷制根絶へ、◇3教会が統合 京都教区刈谷教会

◇ネパール大地震で死者5千人超 キリスト教界も救援開始、募金呼び掛け

ネパール中部で4月25日、マグニチュード7.8の巨大地震が発生、ネパール政府当局者は29日、死者が5000人、負傷者も1万194人に上ったと明らかにした。インドや中国など周辺国も含めた死者は約5400人になっている。ネパール政府当

局者は死者数が8千人を超える可能性があるとの見方を示している。

地震で雪崩が発生、少なくとも17人が死亡した世界最高峰エベレスト（8848メートル）のベースキャンプ付近など高地では数百人が取り残され、救助を待っている。

カトリック教会の救援組織「国際カリタス」は、「米国カリタス」がインド駐在事務所を通じて救援物資を送る体制を整え、「カリタス・インド」も救援活動開始準備をしている。「カリタス・パキスタン」も人員派遣などの準備を始めた。現在、インドから陸路でのネパール入りを検討しているが、インド側でも地震の被害があり、実現には時間が掛かりそう。

世界教会協議会（WCC）とアジア・キリスト教協議会（CCA）は26日、ネパールと近隣の被害地域に宛てた緊急人道支援を呼び掛ける声明を発表した。（キ9日、ク10日付）

◇ “苦しみ共にする人道援助を、大澤真幸氏が「純粹平和主義」強調

社会学者の大澤真幸氏が4月23日、「戦争と平和と正義——戦後70年に憲法を考える」と題して日本カトリック会館（東京都江東区）で講演した。日本キリスト教連合会（岡田武夫委員長）が主催した。『憲法の条件——戦後70年から考える』（NHK出版新書）の共著者でもある大澤氏は、自衛隊は客観的に見れば軍隊であり、「どう考えても憲法違反に近い解釈改憲だ」と主張。また日米安保条約についても、憲法の問題に反することは明らかだと述べた。その上で、他国から侵略された時の対応について、9条支持派の考え方は、「逃げる」ことと、「安保と自衛隊にただ乗りする」ことに二分されるとし、9条の理念を維持するためには「安全」と「平和と正義の関係」について考えなければならないと主張した。そして、「平和」を「正義」の問題の一部として考えることを提唱。「正義」との関係における「戦争と平和」の考え方について、「正戦（聖戦）論」「プラグマティズム（実用主義）」「自衛戦争論」「純粹平和主義」の四つに類型化した。

その中で「純粹平和主義」は、すべての戦争は悪いと考え、政治的な手段として戦争を使わない立場。侵略者に対して非暴力的な方法で抵

抗することは、侵略者にとっては国際的孤立を招き、無防備の一般人を攻撃することが道徳的負担にもなると指摘。「日本が少しくらいの軍隊を持っても永続的な安全にはつながらない。非暴力的抵抗の方が政治的実効性は高い」と主張した。「普遍的正義」を前提とするこの立場は、他国での人権侵害や虐殺に対する人道的介入を積極的に支持するものであり、そのために自衛隊の意味付けや組織を変えることも提案。映画『ルワンダの涙』に言及し、ラストシーンにおいて、キリストがその場において一緒に苦しんでいることが最低限の救いだとし、「軍事力を放棄した上での人道援助」とは、そこに行き詰っている人たちと一緒に苦しむことだと強調。アフガニスタンで活動する医師の中村哲氏をその実例として挙げ、そのような人道的援助を日本の外交戦略の基軸にできれば、日本は世界で一番安全な国になると訴えた。

（キ9日、ク24日付）

◇ 第15回国家晩餐祈祷会で廣瀬氏 みんなを生かす神の御国を

教派を超え、日本の国、各界の指導者や関係者のため、世界の平和のために祈る「国家晩餐祈祷会」（日本CBMC〔基督教実業人会〕主催）が4月24日、東京・新宿区の京王プラザホテルで開催され、390人が参加。第15回を数える今年、東京キリスト教学園理事長の廣瀬薫氏が「我らは御国の協働体」をテーマにメッセージをした。また当日は、国務大臣地方創生国家戦略特別区域担当の石破茂氏が、統一地方選挙中にもかかわらず駆けつけ、挨拶した。

（ク10日付）

◇ 流木の十字架の教会新会堂献堂 気仙沼第一聖書バプテスト教会

東日本大震災の津波により会堂を流され、教会堂跡地に流木で作った十字架を立て主を証した、保守バプ・気仙沼第一聖書バプテスト教会（嶺岸浩牧師）の新会堂第一期工事が終了し礼拝堂が完成した。4月29日に行なわれた献堂式には、全国から300人を超える参会者が集まった。挨拶文に「教会は大津波によりすべて流されてしまいましたが、主の大いなる愛とあわれみが押し寄せてきました。この新会堂が主の栄光を現わし、地域に開かれたコミュニティーの教会として用いられ、

福音宣教の働きを通して多くの魂が主に立ち返るために励んで参りたいと思います」と記した嶺岸氏は、司式の中で、「絆の大切さを教えられて来たが、まず第一に神様との絆を築くべき」と語った。
(ク10日、24日付)

カトリック新聞(5月17日)

◇ 教皇 ネパール大地震 犠牲者のため祈り 援助要員への連帯示す、◇ 教皇フランシスコ 結婚について連続講話 不平等は「醜聞」、◇ ノートルダム教育修道女会 ネパールの修道女ら無事 救援活動も開始、◇ 校長・理事長・総長管区長の集い(東京) “最後のとりで”と期待も 生徒ら年2千人減でも大切な役割、◇ 平和賞も創設 シグニスジャパンの映画賞

◇ 互いに “違う、からこそ強みがある「東北ヘルプ」にエキュメニカル功労賞

日本エキュメニカル協会(JEA、松山與志雄理事長)が毎年顕彰している「エキュメニカル功労賞」の21回目となる顕彰者に、仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク・東北ヘルプ(川上直哉事務局長 日基教団北三番丁教会担任教師)が選ばれた。JEAが制定する「エキュメニズムの日」の4月29日、カトリック麹町聖イグナチオ教会(東京都千代田区)で顕彰式が行われた。

東北ヘルプは、東日本大震災の被災地支援のために2011年3月18日、仙台キリスト教連合を基盤として設立された。教会の再建を支援し、支援者と教会のネットワークを構築して、50万人以上の被災者を支援してきた。現在は、津波被災者の心理社会的・精神的側面へのケアを進め、放射能被害の減災を目指して活動している。

(キ23日付)

◇ テレビ朝日系列「ぶっちゃけ寺」バラエティ番組に神父と牧師ら出演 仏教との意外な共通点?

「お坊さんバラエティ」として人気を博するテレビ朝日系列の番組「ぶっちゃけ寺」(5月11日放送)に、キリスト教の神父と牧師、シスターが出演した。宗派を超えた複数の僧侶らが出演し、「爆笑問題」の2人(太田光さん、田中裕二さん)による司会のもと、ゲストを交えて仏教の教えやお寺、お墓にまつわる知識を掘り下げるといふ教養娯楽番組。これまで神道から神主

が出演した回はあったが、キリスト教をテーマとして取り上げたのは初めて。今回の放送では「お坊さんが聞く深〜い質問で意気投合しちゃいましたスペシャル」とのタイトルで、長崎県の大浦天主堂でのロケも敢行。仏教とキリスト教との共通点に迫った。
(キ23日付)

◇ 発達障害とは何か?—キリスト教カウンセリングセミナーで原仁医師が講演

「聖霊によるキリスト者の一致」を体現する聖会「ホームカミング・ジャパン・ギャザリング・神戸」が、5月3日神戸市中央区の神戸国際展示場2号館で開幕した。参加者は30カ国に上り、初日は多少空席が見られたものの、4日は会場に立錫の余地もないほどの人が溢れかえった。

圧倒的な賛美と、訓練されたダンスチームによる踊り。そしてそれに呼応し、ともに賛美し踊る会衆。「お帰りなさい」と互いに神の家族が一つ所に集まった喜びを分かち合い、主を礼拝した。ギャザリングは6日の午後まで行なわれる。

(ク24日付)

◇ 花園ラグビー場ゴスペルフェスタ開幕「花園」初の音楽イベント

5月2日、「花園ラグビー場ゴスペルフェスタ」(同実行委員会主催、東大阪市、東大阪市教育委員会後援)が、東大阪市の花園ラグビー場で開幕した。東大阪市長野田義和氏もあいさつ。東大阪市民ゴスペルクワイア、タンバリンチームレインボウ他、多彩なゲストが出演、元ニュージーランドオールブラックスメンバーのティモ・タガロア氏、元日本代表大畑大介氏によるラグビークリニックも。タガロア氏はメイン会場で証しもした。花園ラグビー場89年の歴史で、音楽イベントは初めて。5月3日まで開催。入場無料。
(ク24日付)

カトリック新聞(5月24日)

◇ 教皇フランシスコ 家庭についての講話 親しい仲間にも礼儀必要、◇ キューバのカストロ議長 教皇との会談に感銘＝「また祈るかもしれない」、◇ 戦後70年 日本司教団メッセージ 米国司教が評価、◇ 合宿所など訪問 高知 フィリピン人研修生ら司牧、◇ ヴァチカン教皇庁図書館展Ⅱ 東京の印刷博物館で7月12日まで

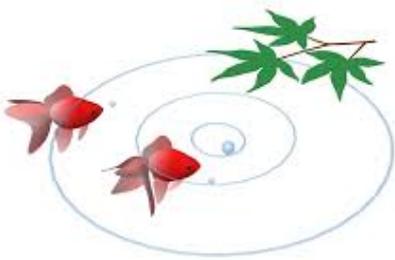
◇ 安全保障関連法案閣議決定の日に牧師の会が 国会議員要請

政府が集団的自衛権行使のための安全保障関連法案を閣議決定した5月14日、「特定秘密保護法に反対する牧師の会」（共同代表：朝岡勝、安海和宣）の牧師ら有志7人は直接議員の部屋を訪れ、「『秘密保護法』撤廃と、『集団的自衛権行使』法整備を行わないでほしい」「国会で十分な審議を」と、要請を行った。

国会議員要請は3月20日にも行われたが、今回は与党自民党、公明党の議員18人を訪問。その中には、安倍晋三首相、石破茂国務大臣、谷垣禎一幹事長、山口那津男公明党代表なども含む。そのほとんどは秘書が対応。参加した牧師からは、「門前払いを覚悟して参加したけれども、予想に反して私たちの要望を聞いてくれた」「自民党内でも様々な意見があり、皆が集団的自衛権行使に賛成ではないことが分かった」と手応えを感じていた。牧師の会は、今後もこういった国会議員要請を地道に続けていきたいと願っている。（ク31日、キ6月6日付）

カトリック新聞(5月31日)

◇ 国際カリタス総会 ローマで開催 環境破壊等、
焦点に 新総裁にタグレ枢機卿 アジアから初選出、
◇ パレスチナの2修道女列聖=教皇=「信仰は愛
のわざに」、◇ 大分 教区創立の原点に「愛徳の
業」「福祉塾」開き 学ぶ、◇ 原発事故受け、韓国
の教会が省察 『核技術と教会の教え』日本語訳、
中央協から発行、◇ ロメロ大司教 列福 エルサル
バドル内戦期に暗殺



◇日・中・韓・米 国際シンポ「和解と平和のための 祈り」にR・ヘイズ氏ら 悲惨な経験、平和と和解へ

米デューク大学神学部和解センター「北東アジアキリスト者和解フォーラム」主催による国際シンポジウム「北東アジアにおける和解と平和のための祈り」が4月26日、長崎原爆資料館（長崎市平野町）を会場に開催された（長崎市、長崎キリスト教協議会、活水女子大学、長崎外国語大学、青山学院大学宗教センター、同大学校友会長崎県支部、キリスト新聞社後援）。キリスト教の歴史と迫害、そして第二次大戦中の原爆といういくつもの悲惨な経験を、平和と和解へと転換してきた象徴的な都市長崎に、日中韓米のキリスト者らが集い、約100人の市民の前で語り合った。（キ6日付）

◇ ナショナリズム超え、和解と平和を 米・韓・台・ 日の学者が青学で国際シンポ

長崎で4月26日に開催された「北東アジアの和解のためのキリスト教フォーラム」のフォローアップ・セッションとして5月2日、東京・渋谷の青山学院大学で、国際シンポジウム「北東アジアにおける和解と平和のために」が開催された。テーマは「ナショナリズムを超えて」。同大学と米デューク大学神学部が共催し、約80人が参加した。

長崎でのフォーラムに続き、リチャード・ヘイズ氏（デューク大学神学部長・教授）が登壇したほか、韓国からサムエル・パン（延世大学神学部副部長・教授）、日本から梅津順一（青山学院院長・教授）の両氏が発題。参加を予定していた台湾のマブ・ホアン氏（スーチョウ大学政治学部教授）は欠席し、講演の原稿が読み上げられた。（キ6日付）

◇ 奥多摩福音の家50年「天国の前味」提供し続けた

幅広くクリスチャンのキャンプや修養会などに利用されてきた、東京・西多摩郡奥多摩町の「奥多摩福音の家」が今年、設立から50年を迎え、「福音の家50周年記念式典」が5月23日に執り行われた。午前11時から記念礼拝、午後1時半からは感謝会が開かれた。式典には、これまでキャンプ場を利用してきた人たちや教会関

係者ら、他にキャンプ場の地主など約200人が集まった。
(ク7日付)

カトリック新聞(6月7日)

◇ 日本カトリック管区長協議会・日本女子修道会総長管区長会合同総会「証し」する者として 奉獻生活の年 生き方を再確認、◇ アイルランド 同性婚合法化で大司教「現実の把握」が必要、◇ 純利益伸びる バチカン銀行「“ぶどう畑”の働き手支える」、
◇ 教皇 靈的指導者と聴罪司祭の役割、◇ 聖骸布の公認複製 トリノ教区、コンプリ神父に

◇ カトリック誌「あけぼの」60年の歴史を回顧 執筆者ら招き「感謝ウィーク」

カトリックの聖パウロ女子修道会(東京都港区)が発行する月刊誌「あけぼの」が、創刊から60年目を迎えた今年、4月号をもって休刊した。5月には特別編集の感謝号が発行されたほか、これまでの歩みに感謝する「あけぼの感謝ウィーク」として、表紙絵の「原画展」、対談、講演が催され、長年にわたる同誌の役割を振り返りつつ、執筆者、編集者、普及・点字・音訳などに携わった関係者の労をねぎらった。25日にはシスターが聖堂に集まり、同誌への思いと共に別れの祈りをささげた。
(キ13日付)

◇ 青学神学科同窓会基督教学会閉会へ 2年後の論集60号の発行をもって

青山学院大学神学科同窓会基督教学会(関田寛雄会長=同大学名誉教授)は5月6日に同大学で総会を開き、2年後の『基督教論集』60号の発行をもって閉会することを決定した。同窓会の活動は継続する。

同学会は、1949年の文学部キリスト教学科(後に神学科に改称)の成立に伴い52年に活動を開始。翌53年から『基督教論集』を発行してきた。77年に神学科が廃科された後も、木田猷一氏を中心に学会活動の継続が呼び掛けられ、同氏の提案により79年に学会会則を変更。同学科の卒業生でなくとも研究成果発表の資格を持つ会員の制度を設けた。しかし、そうした会員も同学会以外での研究発表の場が増え、卒業生の高齢化により研究活動力が衰退してきたことから、2年後の閉会が決定された。(キ13日付)

◇ 第5回東日本宣教ネットワーク全体会議 恵み伝える福祉的宣教

キリスト教福祉という側面から被災地の支援活動、教会形成、宣教の課題を考えることができる。「東日本宣教ネットワーク」第5回全体会議が5月26日、東京基督教大学(TCU)国際キリスト教福祉学科の教員、学生の積極的な参加により、宮城県仙台市の仙台バプテスト神学校で開かれた。岩手、宮城、福島、茨城各県をはじめ各地から参加者が集い、テーマへの議論、各活動報告がなされた。

同ネットワーク代表の住吉英治氏(同盟基督・勿来キリスト福音教会牧師)が被災地の現場の立場から、稲垣久和氏(TCU国際キリスト教福祉学科長)が、教会論、福祉論を論じる立場から報告・提言をした。
(ク14日付)

カトリック新聞(6月14日)

◇ 教皇、サラエボ訪問「平和のための働き」訴える、
◇ 社会司教委員会の連続シンポジウム 第1回 東京教会管区 札幌で開催「現代世界憲章から何を学ぶか」、◇ 連携目指し初会議 難民移住移動者委員会 全国から外国人支援者参加 東京、◇ 看護学部を開設 東京純心大学、◇ 主(キリスト)に一番近い僧侶 仏教から見る諸宗教対話 天台宗 露の団姫さん

◇ 悔い改めの決意、次世代へ 戦後70年にあたり日本福音同盟が声明

日本福音同盟(JEA、中台孝雄理事長)は6月1~3日、第30会総会を静岡県掛川市のホテルで開催し、事業計画、予算等の議案の審議、承認とともに、「戦後70年にあたってのJEA声明」を採択した。それに先立ち、セミナー「戦後70年を迎える福音派の原点」を開き、神学委員会、社会委員会それぞれから講師が立った。初日の夜に行われたセミナーでは、神学委員の山口陽一氏が「日本的キリスト教と福音主義」と題して、社会委員の星出卓也氏が「敗戦から70年、教会が問われ続けたこと」と題して講演した。

声明は、戦後の日本で福音派キリスト教会が結集した原点には、「聖書の規範性と基本教理をないがしろにする自由主義神学との対峙」と「戦時下でイエス・キリストだけを主とする信

仰告白を弾圧懐柔した天皇制・国家神道体制を標榜するナショナリズムとの対峙」という二つの軸があったことを示し、1968年にJEAが設立されるまでの経緯を説明。95年の「戦後50年にあたってのJEA声明」でアジア諸国への侵略加害に加担したキリスト教会の罪責の悔い改めと謝罪を表明したこと、また2005年の「戦後60年にあたってのJEA声明」で平和を造り出す者となる決意を言い表したことに言及し、「しかしながら、この10年の歩みを振り返るとき、それらの言葉の内実を問い、具体化することにおいて十分であったとはいえません」として、悔い改めを新たにした。

戦後70年を迎え、歴史修正主義が台頭し、ヘイトスピーチ問題などにみられる民族差別が顕在化していることを指摘。また、国旗・国歌の強制、一部閣僚による神社参拝の常態化など、信教・思想の自由を脅かし、天皇制・国家神道体制の復活につながるような動きがあることにも言及。特定秘密保護法制定、沖縄の米軍基地問題、閣議決定のみによる集団的自衛権行使容認の流れの中で、安全保障関連法案が国会で審議されていることに触れ、「キリスト教界においては、戦前と同じような日本的キリスト教を標榜し、皇国史観のナショナリズムに迎合するような動きが再びみられるようになってきています」とも述べた。

そうした中で、「戦時下における日本の教会の罪の歴史と悔い改めの決意」を次世代に伝えることを表明。「聖書を誤りなき神のみことばと信じる聖書信仰のゆえに、神の似姿として創られた人間の尊厳といのちを脅かし、敵意と争いを生み出すあらゆる力に抵抗し、イエス・キリストの十字架にあらわされた神の愛を人々に伝えると共に自ら生き、家族・地域・社会でその愛による平和と和解が実現していくように努力します」と述べ、国家と教会の正しい関係を指し示し、平和を造り出す者となることを表明した。(キ20日付、ク21日、28日付)

◇ 独創的なプログラム考える努力を 日本クリスチャンキャンプ協議会がセミナー

キャンプ宣教を通してキリスト教会に仕えることを目的としている日本クリスチャンキャンプ協議会は5月30日、キリスト教キャンプの魅力

と宣教における役割、キャンプの工夫について考えるセミナーを、日本同盟基督教団中野教会で開催した。キャンプ場スタッフや、教会関係者、青年など約30人が集まった。

講師として、米ハワイにあるニューホープ・クリスチャン・フェローシップ・オアフの支部教会である、ニューホープYOKOHAMA副牧師の山口武春氏が招かれた。

山口氏は、「ここまで凄い！キャンプの魅力！—キャンプの働きに関わるために」と題して講演。キャンプでは、福音を伝えるために、独創的なプログラムを考える努力が必要であり、特にテレビ、インターネットなどさまざまな刺激の中に生きている今の子どもたちに、「教会のキャンプはつまらない」と言わせない、刺激のあるキャンプ、予想を裏切るような驚きのあるプログラムが必要だと語った。

さらに決して譲ってはいけないこととして、「キャンプが神を礼拝する場であり、キャンプを通して主のみ名があがめられなければならない」と強調。「神の臨在を味わい、神のスピリットを感じ、常に魂が救われる奇跡を見るキャンプを目指していくべき」と語った。

(キ20日付)

◇ 自然エネルギー、総合芸術の例から「ローザンヌ・シンポ」

世界的な宣教運動ローザンヌ運動が提示するテーマを考えるシンポジウム「包括的な日本宣教を考える」（日本ローザンヌ委員会主催）第5回が、5月23日、お茶の水クリスチャン・センターで開かれた。今回は「ケープタウン決意表明」（2010年）2章A「多面的でグローバル化した世界にあって、キリストの福音を証しする」を扱った。「社会変革プロジェクトを担う次世代グローバル人材を支える宣教協力」を主題に、日本のワークプレイス宣教やビジネス・アズ・ミッションの事例を紹介し、事業体やNGO/NPOなど多様なビジネスネットワークを通し宣教に熱心なグローバル人材の興起とそれを支える地域・業際ネットワーク拡大を目指した。(ク21日付)

◇ 福祉の「働き手」を育て送り出す責務 第1回サポートネットワークシンポで

社会福祉法人キングス・ガーデン東京（泉田昭理事長）は、福祉・教育・教会のネットワーク作りを企図した第1回サポートネットワークシンポジウムを5月30日、日本イエス・キリスト教団荻窪栄光教会で開催した。

本シンポジウムは昨年3月、福祉施設や在宅介護サービスの充実を図ることを目的に設立された「サポートネットワーク」の一環として企画されたもの。今回は「福祉・介護の『働き人』を送り出す」を主題とし、キリスト教福祉に携わる「働き人」をどう育成するかについて、教会、施設、教育機関の関係者ら約160人が、パネルディスカッションや分科会を通じて意見を交わした。

講師の市川一宏氏（ルーテル学院大学前学長）は、「『おめでとう』で始まり『ありがとう』で終わる人生——福祉とキリスト教」と題する講演で、一人ひとりの命が軽視されている現状に警鐘を鳴らし、「『おめでとう』と祝福され、『ありがとう』で終える人生を支えるのが福祉の実践であり、共に生きていくことの意味を学び、自己成長をもたらすもの」と説いた。また、「人々の苦しむ姿に共感して駆け寄るならば、神を信じる、信じないにかかわらず、神と結ばれた共に歩む隣人」だとし、信徒以外の人々とも連帯して「希望の光」を灯す歩みを続けたいと語った。

講演を受け、阿久戸光晴（聖学院理事長・院長）、廣瀬薫（東京キリスト教学園理事長）、中島秀一（荻窪栄光教会牧師）、中島真樹（練馬キングス・ガーデン施設長）の4氏が、それぞれの立場から応答。阿久戸氏は、福祉の仕事が「きつい」「汚い」「危険」と避けられる一方、「清く」「気配りし合える」「光栄な」収穫の多い職務であることを強調し、祈りと責任を持って「働き手」を育てる必要性を訴えた。中島真樹氏は、「やる気と適性を持った人であれば、一定の研修を経て自立し、継続して働くことができる」とし、実際に介護職のやりがいを感じたという職員の声も紹介した。

（キ27日付、ク14日付）

◇「宗教者に敬意払わない社会」懸念 日本宗教連盟が「家族」テーマにセミナー

単身世帯が増加する一方、家庭内暴力や引きこもりなど「家族」をめぐる問題が表面化する

中、「多様化する『家族』のあり方に向き合う」をテーマに、日本宗教連盟主催の第4回宗教文化セミナーが6月5日、セレニティホール（東京都杉並区）で開催された。主題講演を行った石井研士氏（国学院大学教授）は、1953年では5人だった平均世帯人数が、2013年では2.51人まで減少したことを提示。30～34歳の未婚率は男性47.3%、女性34.5%であり、そもそも結婚しない状況にあることを示した。

また、単身世帯が全世帯の31.2%を占めていることも指摘。子どもが少ない理由として、経済的問題とライフスタイルの変化を挙げ、同性パートナーシップや、結婚しても子どもを持たないことを選択するなど、さまざまな家族形態が生まれていることに触れた。

その上で、家族の在り方が変わることで家庭生活が変わり、世代間の文化の継承が行われず、家庭における神棚と仏壇の保有率が減少していることも指摘。「家庭の中が非宗教化していく。聖なる部分がなくなっていく中で育った子どもたちがこれからますます多くなる。わたしたちの『家族』は非聖化しているのではないか。それが一体日本の文化にどのような影響を持つのだろうか」と問いかけ、宗教者・宗教団体が敬意を払われない社会になることを懸念。宗教者・宗教団体の社会貢献が認知されていない現状についても憂慮した。

パネルディスカッションでは、山下輝信（金光教財務部長）、柏昌宏（浄土宗道往寺住職）、出射優行（立正佼成会布教開発部長）の3氏がそれぞれ取り組みを紹介し、渡辺雅子氏（明治学院大学教授）がコメンテーターを務めた。

今回のセミナーは、「宗教は『家族』と『地域社会』を再生できるか」を総合テーマに掲げた3回シリーズの最終回。これまで、「悩める若者にどう向き合うか」、「『限界集落』化する地域社会と宗教の力」をテーマとしてきた。

（キ28日付）

◇ OMF宣教大会 初のアジア人総裁パトリック・フン氏講演 エジンバラからケープタウンへ 神の言葉を世界を愛する

今年は、英 OMF 国のハドソン・テラーが中国に派遣する宣教師を送ってほしいと祈ったことを機にチャイナ・インランド・ミッション（CIM、中国奥地宣教団）が誕生してから

各雑誌記事から 【2015年4月～6月】

4月

「百万人の福音」

◇ 特集:メメント・モリ 死を意識して生きる

1. 「メメント・モリ」という生き方、2. 生を見つめ最後まで生きる 救世軍清瀬病院ホスピス病棟、3. 主が与えてくださる一期一会の重さ、4. 死への具体的準備、5. 「死」の先にある確かな希望、◇ 旬人彩人:福岡ソフトバンクホークス投手 ジェイソン・スタンリッジ、◇連載:①クリスチャン弁護士の日々思うこと、②ひきこもり院長のつれづれ日記、③侍クリスチャンのスズメ、④いのちの砦、⑤ひかりの道すじ、⑥ぷんぷんのこと、一月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会:清水聖書バプテスマ教会、⑩教会津々浦々:青森市・高知県、⑪ブルーリボン・レポート32

「信徒の友」

◇ 特集:イースター 私にとって復活とは

1. 復活がなければ希望はない、2. 聖書が語る復活の物語、3. 証し:①どんな現状でも甘えさせない導き、②自分によらず、神に信頼すること、③消えかけた教会の灯がよみがえった、◇特別読物:①「信徒の友」創刊50周年記念東京大会報告、②後藤健二さんの死を悼んで、◇連載:①教会のトピックス、②わが家の“わんにゃん!”、③献堂しました、④祈りの大地、⑤ひかり&しおん、⑥キリスト教と香りの世界、⑦聖なる光と祈りの空間、⑧シネマへの招待『ディオールと私』、⑨みことばにきく、⑩預言者の声に聴く、⑪私のがん体験記、⑫キリスト教学生寮のいま、⑬被災地からの問い、⑭マンガ キリスト教入門、⑮神に呼ばれて [聖職者編] [信徒編]

「福音と世界」

◇ 特集:教会と職業、そして召命

1. 「神学教師」の職場、2. 信仰教育から召命教育へ、3. 神に呼ばれた仕事、4. キリスト者として社会問題に発言する一地方自治体から日本社会の正義の実現へ、5. イエズス会の

150年。その宣教と使命はOMF（オーバーシーズ・ミッショナリー・フェローシップ）インターナショナルと名称を変えた今も続いている。来年創立50周年を迎えるOMFインターナショナル日本委員会（菅家庄一郎総主事）はこの節目の年、OMFインターナショナル初のアジア人総裁であるパトリック・フン氏と妻のジェニー氏、デイビッド・ファーガソン氏（OMF日本フィールド総主事）を講師に招き、6月6日から21日まで、「OMF宣教大会」を日本各地で開催した。（ク28日付）

◇ ワールド・ビジョン・シンポ「ポスト2015開発アジェンダ」へ 子ども優先の世界目標に協働

世界の子どもを取り巻く環境はまだまだ厳しい状況だ。2000年に策定された国際的な開発目標MDGs（ミレニアム開発目標）は、今年、達成期限を迎える。8つの目標のうち4番目の「5歳未満児の死亡率を1990年の水準の3分の1にまで引き下げる」という目標の達成は困難だ。9月には国連において2030年までの新たな目標（ポスト2015開発アジェンダ）が策定される。

これらの働きには、政府、諸団体とともに、キリスト教NGOも貢献している。国際NGOワールド・ビジョン・ジャパン（WVJ、www.worldvision.jp/）は政府、学識、国際機関の関係者を集め、6月8日に国際シンポジウム「MDGsから『ポスト2015開発アジェンダ』へ～救えるはずの子どもの命を、すべて救うために～」を東京・中野区の同所で開催した。次期開発目標では、最も弱い立場にいる子どもたちへの支援を優先すべきこと、などが話し合われた。（ク28日付）

カトリック新聞(6月28日)

◇ 教皇 新回勅で環境保護訴える 神を賛美する全ての創造 その歌声をかき消す人間、◇「愛は死より強い」教皇 家庭が直面する問題で講話、◇ 定例司教総会 ミサの変更箇所を研修 脱原発についても学ぶ、◇「新しい人道主義」を パチカン 国務省長官、ユネスコで講話、◇ 2学校法人合併へ 南山学園と聖園(みその)学院

(カ:カトリック新聞、キ:キリスト新聞、ク:クリスチャン新聞)

【文責:柴田 初男】

職業観、◇**新連載**：①レヴィナスの時間論『時間と他者』を読む1、②CHRISTIAN ICON キリスト教美術案内1、◇**集会報告**：日本軍「慰安婦」問題への取り組み、◇**連載**：①聖書 味読4「多様な思いの中で」一コリントの信徒への手紙 1 10章23節-33節、②私のごすべるくろにくる 40 2009、This Is It、③中国教会通信8：中国教会は「ポスト教派」か？、④ドイツ教会通信2—教会難民をめぐって、⑤現代日本の福音（エヴァンゲリオン）8、⑥佐藤優のことばの履歴書13、⑦南島キリスト教入門6、⑧詩編の思想と信仰122、⑨新約釈義—第一コリント書13

「舟の右側」

◇ **インタビュー**：仕えること、伝えること「いっばいっば岩手」現地リーダー高橋和義さん

◇ **FEATURE 支援と宣教**：①砕かれた器に注がれた神の愛、②地元にも編み込まれていく働き、③3・11震災から考える支援と宣教、④津波被害から回復した教会、⑤一押し書評：『見上げる空「被災地」から見える教会の姿』、◇**特別寄稿**：トマ・ピケティ著『21世紀の資本』を“読む”、◇**新連載**：必要なことはただ一つ、◇**連載**：①神様に呼ばれてどこまでも！、②黙示録の今日的メッセージ、③被造物管理の神学シリーズ その6、④旧約聖書の誤解・正解・分からない、⑤夫婦の癒しと回復を求めて、⑥ジャンル別新聖書解釈入門、⑦教会成長ここがポイント、⑧月ごとに、週ごとに、⑨周知一筆

「HAZAH」

◇ **特集**：七つの山Ⅲ キリシタンと教育

1. 日本のホームスクールとチャーチスクール、2. 現実の必要の中で出会って下さる主、3. 教育とキリスト教会、◇**連載**：①創造と福音、②本文批評学の中の光と闇12、③不思議な番号3・16、④今聖霊が教会に語っておられること12、⑤仮庵祭Ⅳ、⑥奥の間の油注ぎ、⑦愛とロマンの地へ、⑧花園ラグビー場ゴスペルフェスタ開催決定！、⑨ダビデの幕屋の回復、⑩世に影響を与える御国の力、⑪リーダーズミーティング in ドイツ、⑫もし土台が崩されたら義人は何ができるか

「福音宣教」

◇ **特別企画**：神を愛し、人を愛す ③

1. 真実だったら共有できる、◇ **番外編**：希望への物語 1. 大震災に宗教や科学、芸術はどのように反応したのか（下）、◇ **月間テーマ**：1. 福音宣教の観点から見た家庭の司牧的課題、2. カトリック信者にとっての結婚、3. 私たち、夫婦です、◇ **連載**：1. 奉獻生活への招き ④、2. 一人ひとりが大切にされる社会に向けて ④、3. キリシタンの生き方に学ぶ ④、4. みことばが互いに響き合っ—ことばの典礼を生活に生かすために、5. 食卓からのおもてなし—祈りをこめて⑮

「福音と社会 No. 278」

◇ **詳報**：教皇がバチカン官僚らに回心を求めた説教の詳細「教会エリートが無条件に救われるなどと思ってはならない」、◇ **資料**：「戦後70年司教団が平和実現への決意を表明した」、◇ **社研勉強会**（講演採録）：資本主義の終焉と歴史の危機、◇ **鐘桜**：「償い」—殲滅の論理が置き忘れたもの、◇ **カトリックアイ**：＜政治＞護憲の意思を政権不信任で示そう、＜国際＞殺戮と報復に代え愛と正義の実現を、◇ **チャーチナウ**：新枢機卿20人の出身国分布、◇ **読者の随筆**：サポートステーション「もみの木」ボランティア体験記、◇ **読者のレポート**：光州事件を考える3フォーラムを取材して—「人権を定着させるにはこうも大きな犠牲が必要なのか、◇ **読者の考察**：「恥じる」こととキリスト教—聖書の中の「恥」と日本人の「恥」、◇ **グラフ**：キリストの風薫る街ぶらり・ぶらり⑮ブラーニー（アイルランド）—城壁に開いた穴から身を乗り出して、“私審判を受ける自分”を覗き見た

「羊群」

◇ **今月のテーマ**：人生の選択

1. 特別寄稿：「私を変えた、人生のターニングポイント」、◇ **連載**：①アルコイリスからの便り「汚れたものから分離せよ（魔術とは何か？）、②性について本当のことを知りたい：私たちは性についてあまりにも無知です」「ふさわしい助け手とは？」他、③イエスのたとえ話「宴会のたとえ」、④一緒に学ぼう「創世記35-37章」

「あけぼの」

◇ 特集:人はなぜ学ぶのか

1. (対談) ミッションスクールの贈り物、2. キリストの十字架の死による隣人愛を伝える学校、3. なぜ人は学ぶのか、4. 地域の中でキリストのいのちを生きる学校、5. 神庭先生のクリニック、◇連載: ①シネマの窓、②アジアに生きる: 「ビルマルート」を進みながら思う、③こどもたちと読む聖書、④キリストの愛を日本と中国に、⑤光と風のおくりもの、⑥ 活憲といのち、⑦子育て塾、⑧時の岸边にて、⑨ミステリアスな日々

5月

「Ministry」

◇ 特集:過疎と教会 今そこにあるキボウ

1. 聖公会の場合・高知、2. 日本基督教団の場合・秋田、3. カトリック教会の場合、4. まとめ代えて、◇ シリーズ・21世紀 神学の扉「嘆きの神学」、◇ インタビュー: シスタークリスティーナ あの“歌う”シスターが来日!!、◇グローバル・エキュメニズムからの便り、◇主の祈り、◇説教鑑賞「福音漬けにしましょう」、◇ワタシの礼拝論 礼拝改革試論(3)～礼拝の流れと構成、◇看取りと悼みのミニストリー:すべてを主にゆだねて、◇連載: ①人物で見る中国キリスト教、②「福祉経営」の求める成果、③マンガ「こちらミニスト編集部」、④リレー連載「牧師たちの日常」、⑤「教会と地域福祉」フォーラム21、⑥教界のオシゴト、⑦ 電脳牧師に訊く IT 活用術、⑧シネマ黙想『レフト・ビハインド』『奇跡の人』ほか、⑨空想神学読本「ジョジョの奇妙な冒険」にみる選民イスラエルの召命

「季刊 教会」

- ◇ 巻頭論壇: 大いなる信任 ◇ QK論文: 1. 同じ場所から世界に向けて～バルメン宣言80周年記念展～、2. ジョナサン・エドワーズにおける救済の契約: 内在的三位一体と経綸的三位一体の接点、3. 聖書と文学 その四 ハイジー登場人物すべての信仰の物語 その2、4. 創造への問い その11 <アダムとキリスト>、◇ QK随想: 1. 教会人として、キリスト教学校法人として、2. 教会財政雑感、3. 教会とIT、4.

大いなる恵み、大いなる導きに感謝して、◇ウェストミンスター大教理問答リレー黙想、◇本のオアシス: 1. <わたしを変えた一冊>カール・バルト著『ローマ書』、2. 本の道しるべ(ブック・レビュー)、◇聖書霊解: 1. コリントの信徒への手紙二10:7-11、2. コリントの信徒への手紙二 10:12-18、◇海外ニュース: 中国における改革派神学リバイバル、◇牧会八七話: 視野の拡大と深化のために

「百万人の福音」

◇ 特集:いまキリスト教映画が熱い!

1. 話題作・一挙紹介、2. キリスト教映画のスペシャル対談 小川正弘 vs 磯川道夫、3. キリスト教映画ベストセレクション20、4. ～聖書と映画～ことばに生かされる 岩井基雄、◇旬人彩人: NPO 法人 ホットスペース中原 代表佐々木炎、◇ あしあと: バングラデシュで医療宣教 近藤 恵、◇連載: ①マンガ ななさんぼ、②いのちのことばが人生を拓く、③ひきこもり院長のつれづれ日記、④侍クリスチャンのすゝめ、⑤ひかりの道すじ、⑥ぷんぷんのこと、五月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会: 笠間キリスト福音教会、⑩教会津々浦々: 北海道・徳島県、⑪ブルーリボン・レポート33、⑫いのちの砦、⑬マンガ すてきな毎日、⑭マンガ、喫茶ホーリー、⑮コトノハラボセレクション、⑯文芸 旅人の詩/短歌/俳句、⑰クロスワード、⑱明日へのピクニック、⑲もぎたてぶどう倶楽部 お便り・BOOK、⑳今月のみことば一句

「信徒の友」

◇ 特集:そして家族になる

1. 回復する家族、2. 現代における家族の危機と再生、3. 文学・映画に見る家族の形、4. 証し: ①愛されているという実感があるからこそ、②生まれてきてくれてありがとう、◇特別読物: ①北海教区年頭修養報告、②『自死遺族支援と自殺予防』、◇連載: ①教会のトピックス、②わが家の“わんにゃん!”、③献堂しました、④祈りの大地、⑤ひかり&しおん、⑥キリスト教と香りの世界、⑦聖なる光と祈りの空間、⑧シネマへの招待『バードマン』、⑨みことばにきく、⑩預言者の声に聴く、⑪あらすじで読むキリスト教文学 ⑫私のがん体験記、⑬キ

リスト教学生寮のいま、⑭被災地からの問い、
⑮マンガ キリスト教入門、⑯神に呼ばれて〔聖職者編〕〔信徒編〕

「福音と世界」

◇特集:教会と憲法、人権と平和

1. 政治における嘘と立憲主義、2. 武力で平和は作れない、3. 新約聖書のパシフィスト・ヴィジョン、4. 日本国憲法第九条 北東アジアの平和の礎、5. 寄留の牧者・神学者 李仁夏牧師—移住民の神学の素材として、6. 私たちは遺志を継げるのか、◇**新連載**:宣教学・事始め1 (1) 宣教師の心理学、◇**連載**: ①聖書味読5、②韓国教会通信3、③カナダ教会通信3、④レヴィナスの時間論『時間と他者』読む2、⑤CHRISTIAN ICON キリスト教美術案内2、⑥現代日本の福音(エヴァンゲリオン)9、⑦佐藤優のことばの履歴書14—過去の歴史を歪曲してはならない、⑧南島キリスト教史入門7、⑨私のごすべるくろにくる41、⑩新約釈義—第一コリント書14 (1:10-17)

「舟の右側」

◇**インタビュー**:「怒り」をどう扱えばいいのか?、◇**一問一答**:「神の怒り」をどう理解すればいいのか?、◇**シリーズ 教会と教会堂**:チャーチ・オブ・ゴッド 川崎キリスト教会、◇**一押し書評**:『改憲問題とキリスト教』、◇**連載**: 1. 神様に呼ばれてどこまでも、2. 必要なことはただ一つ、3. 黙示録の今日的メッセージ、4. 被造物管理の神学シリーズ その7、5. 旧約聖書の誤解・正解・分からない、6. 教会成長ここがポイント、7. 夫婦の癒しと回復を求めて、8. ジャンル別新聖書解釈入門、9. 月ごとに週ごとに

「HAZAH」

◇特集:七つの山皿 クリスマンと教育②

1. 最高の教育者であられる天の父、2. チャーチスクールの圧倒的恵み、3. 教育とキリスト教会、◇**連載**: 1. 創造と福音、2. 本文批評学の中の光と闇13、3. 良き習慣は第二の天性なり、4. 今聖霊が教会に語っておられること13、5. 仮庵祭IV、6. 愛とロマンの地へ、7. 未来へ向かう教会 シフトフォーラム、8. 「愛のコミュニティを建て上げる」、9. 海外宣教&リバイバル便り⑥、10. あなたは憐み深い人か

「福音宣教」

◇特別企画:対談 神を愛し、人を愛す④

1. 「キリスト教徒」から「キリスト者」へ
◇**番外編:希望への物語**: 福島の子どもたちとともに歩む、◇**フォーラム**: 日本の再布教とパリ外国宣教会の動向、◇**月間テーマ:身近なグローバル化** 1. モンゴルの子どもたち、2. 開かれたわが家の門、◇**連載**: ①在俗会での奉獻生活、②大切なものを発見するための農、③キリシタンの生き方に学ぶ「復活キリシタンの再教育」、④復活節第5主日～三位一体の主日、⑤食卓からのおもてなし「二人で一組」

「福音と社会 No. 279」

◇**社研勉強会(講演採録後編)**: 資本主義の終焉と歴史の危機⑥、◇**読者の考察**: 日本社会の「金儲け主義」を助長した大蔵(財務)省の予算編成、◇**バチカン報告**: 特別聖年のテーマ「いつくしみ」の深み—主は何を語りかけ、何を指示されているのか、◇**チャーチナウ**: 原発推進はバベルの塔建設に等しい、◇**鐘桜**: 「十字架につけよ」、◇**カトリックアイ**: <社会>過酷事故からわずか4年で“復活”した驕り「原発バベルの塔」論と司教団指針を胸に刻もう、<政治>宰相・安倍晋三と追従集団による憲法破壊を食い止める最後の一手、◇**社研考察**: 人権尊重に逆行、根底から崩れる「8時間労働制」—「残業代ゼロ法案は女性の活躍を阻害する、◇**祖母と孫が語り合う「戦争と平和」**⑦「真の敵はわが心中の憎・怒・差別にあり」、◇**連載ノンフィクション**: 封印された殉教⑦ バチカンと戸田師と憲兵と、◇**グラフィ**: キリストの風薫る街ぶらり・ぶらり⑧ シャモニー(スイス)—神々しいヨーロッパ最高峰を仰いだ後の感慨は「神に感謝」か「金に感謝」か

「羊群」

◇今月のテーマ:自分のことを知っているのは誰

1. 特別寄稿: 「日本に働く神の恵みを求めて」、◇**連載**: ①アルコイリスからの便り「お金の話し」、②性について本当のことを知りたい「お互いの性を知ることから始めましょう」「私たちは自分の性をいつ自覚するのでしょうか」、③イエスのたとえ話「なくした羊、銀貨、放蕩息子のたとえ」、④一緒に学ぼう「創世記37-38章」

「礼拝と音楽 165号」

◇ 特集:礼拝の「ことば」を考える

1. 「ことば」を語る声の力、2. 座談会:礼拝を「司式」する、3. 「伝わる」聖書朗読のために、4. ハイファイな説教は、ローファイな音響で、5. 心からの賛美の歌声を、6. 讚美歌伴奏とことば、◇**エッセイ**: 1. 牧師不在時の礼拝—インターネット配信の活用とその課題、2. 一人ひとりが輝く礼拝を、◇**特別企画**: 1. 寄稿: 賛美の歌を求めて、2. 式文紹介: WCC クリスマス平和の祈り、◇**連載**: ①読書案内、②ルターと讚美歌(9)、③礼拝とシンボル(4) ④歌おう使おう21、⑤教会音楽ジャーナル、⑥主日礼拝に備えて

「あけぼの 感謝号」

◇**「平和」**①いのちの島、沖縄、辺野古、高江からのメッセージ、②美しい 辺野古の海、いのちを守るたたかひの地より、③「情報鎖国」日本を知る、④戦後70年、次の70年を平和に保つために「もっと聞いておけばよかった」と後悔しない、⑤今こそ知性の復権を 自分という人間を活かそう、⑥若者の旅に思う、⑦「知」が巡るとき、⑧福音と平和憲法と、⑨平和を愛し、つくる人でありたい、⑩生きている一人ひとりを守り抜く決意を、⑪これからの100年の「平和の第一歩」を、⑫これからの日本社会の救いの道は?、⑬戦後70年、これからの100年の平和を願って、⑭切られた繋がりを結び、縛り付けをほどきなさい、◇**女性と子ども**: 1. 対談 女性の視点で語り合う 次世代につなぐものは、2. 平和のための教育とは、3. 思いを伝えて、4. 女性の内なる力を発揮する時代、5. この時代、引き返せるうちに、◇**キリスト教・芸術**: 1. 船の右側に網をおろせ、2. 一人ひとりが創造していく平和への道、3. 映画を見ること、作ること、4. 音訳奉仕者・座談会 「あけぼの」を読み続けて、5. 元編集長・インタビュー、◇**絵と文・写真と文**: ①旅、②鳥たちの祈り、③絵本『希望の木』、④「光、あれ!」、◇**メッセージ**: ①一人一人の心の育ちを大切に、②<主の祈り>、③自尊心を持てる国、④桜と平和、⑤最後だからこそ、⑥非戦争を貫く

6月

「百万人の福音」

◇ **特集:みことば大実験! —愚直に1聖句&1週間—**: 1. おかしくも示唆に富んだ『聖書男』、2. 徹底実験・1week、3. あの人が大切にした聖書のことば、4. 聖霊に満たされ、内なる神の声に聴き従う 榎本 恵、◇ **旬人彩人**: エッセイスト・ラジオパーソナリティ飯島寛子、◇ あしあと: 日本のキングスガーデン創設者 三谷六郎、◇ **連載**: ①マンガ ななさんぼ、②いのちのことばが人生を拓く、③ひきこもり院長のつれづれ日記、④侍クリスチャンすゝめ、⑤ひかりの道すじ、⑥ぷんぷんのこと、六月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会: 山梨バプテスト教会、⑩教会津々浦々: 秋田県・徳島県

「信徒の友」

◇ 特集:子どもと共に

1. 神が子どもに備えた力を土台に、2. 子どもを通して地域とつながる、3. 笑顔がこぼれる! 子ども文庫、◇ **特別読物**: 1. 東日本大震災救援募金、2. 『自死遺族支援と自殺予防』◇ **連載**: ①祈り、②教会のトピックス、③わが家 “わんにゃん!”、④献堂しました、⑤祈りの大地、⑥ひかり&しおん、⑦キリスト教と香りの世界、⑧ 聖なる光と祈りの空間、⑨シネマへの招待『あん』、⑩みことばにきく 内藤留幸、⑪預言者に聴く、⑫あらすじで読むキリスト教文学 三浦綾子『青い棘』、⑬私のがん体験記、⑭伝道推進室、だより、⑮キリスト教学生寮のいま、⑯被災地からの問い、⑰マンガ キリスト教入門、⑱神に呼ばれて [聖職者編] [信徒編]

「福音と世界」

◇ **特集:教会と性** 1. 雅歌研究史から見えてくるもの、2. HIV カウンセリングの現場から、3. キリスト教と性—大学での授業実践から考える、4. 同性愛をめぐるドイツ福音主義教会の取り組み、5. 近くて遠い隣人、6. 聖書から生と性を考える、◇ **連載**: ①聖書味読6、②私のごすべるくろにくる42、③中国教会通信9、④ドイツ教会通信3、⑤宣教学・事始め2、⑥レヴィナ

スの時間論、⑦CHRISTIAN ICON キリスト教美術案内、⑧現代日本の福音（エヴァンゲリオン）10、⑨佐藤 優のことばの履歴書15、⑩南島キリスト教史入門7、⑪詩編の思想と信仰124、⑫新約釈義― 第一コリント書15（1：10-17）、⑬表紙画について

「舟の右側」

◇ 特集：ペンテコステ INTERVIEW「人間の理性」と「聖霊の働き」、◇ インタビュー：なぜなら、「新しい時代だから」、◇ 連載：①神様に呼ばれてどこまでも！、②必要なことはただ一つ、③黙示録の今日的メッセージ、④被造物管理の神学シリーズ その8、⑤旧約聖書の誤解・正解・分らない、⑥教会成長ここがポイント、⑦夫婦の癒しと回復を求めて、⑧ジャンル別新聖書解釈入門、⑨月ごとに週ごとに、⑩風知一筆

「HAZAH」

◇ 特集：七つの山 IV 「クリスチャンと宗教」

1. イスラム内部の二大衝突とイスラム国、2. イスラム教の国に遣わされて、3. ユダヤ人宣教について、◇ 連載：1. 創造と福音、2. 神さまはあなたに夢中です、3. 仮庵祭V、4. ダビデの幕屋、5. 今聖霊が教会に語っておられること14、6. ドイツのプレギヤザリングの意義、7. 主の臨在の中に集う、8. 自分の命が変えられていく、9. 妬みを乗り越えて神の家族に、10. 愛とロマンの地へ、11. 天国―この不安な時代の希望のメッセージ

「福音宣教」

◇ 特別企画：対談 神を愛し、人を愛す ⑤

1. 若い世代に伝えていきたい、◇ 番外編：希望への物語 1. 石巻に移り住んで、2. 神は導いてくださった、◇ 月間テーマ：若者たちへ1. 堅信が入信の完成になるとき、2. ユーキャット―若者のカテキズム、3. 苦悩する若い科学者たちに心を寄せて、◇ 連載：①奉獻生活への招き ⑥一女子跣足カルメル修道会（山口）、②一人ひとりが大切にされる社会に向けて ⑥―スイスで垣間見た地球市民の誕生、③クリシタンの生き方に学ぶ―カクレクリシタン理解の基礎知識、④みことばが互いに響き合っ―ことばの典礼を生活に生かすために、⑤食卓からのおもてなし―祈りをこめて

「羊群」

◇ 特別寄稿：「死をまともに見る ―生きるため―」

◇ 連載：1. アルコイリスからの便り、2. 性について本当のことを知りたい、3. イエスのたとえ話、4. 一緒に学ぼう

各教団・教派、宣教団体の 機関紙・ニュースから

4月

「教団新報 NO. 4818 4/11」

（日本基督教団）

1. イースターメッセージ、2. 2015年 春季教師検定試験、3. 救援対策本部会議、4. 信仰職制委員会、5. 教師委員会、6. 伝道のともしび

「教団新報 NO. 4819-20 4/25」

（日本基督教団）

1. 東日本大震災救援募金、2. 教師検定委員会、3. 世界宣教委員会、4. 信将来構想検討委員会、5. 宗教改革500周年記念事業準備委員会、6. 年金特集、7. 伝道のともしび

「聖公会新聞 NO. 716 4/25」

（日本聖公会）

1. アンデレ磯晴久師 第8代大阪教区主教に、2. 戦後70年主教会メッセージ発表、3. 韓国語による聖餐式がスタート：牛込聖公会聖バルナバ教会、4. 聖公会神学院とウィリアムス神学館で入学礼拝、5. 事実よりも真実を：被災者支援行なう松本晋氏が講演、6. 各教区だより：横浜、北海道、大阪、九州、京都、神戸、東北、東京、沖縄、7. 辺野古新基地は絶対に阻止されねばならない：3月29日、受難週に沖縄キリスト教協議会から声明

「キリスト教学校教育 NO. 682 4/15」

（キリスト教学校教育同盟）

1. 第103回総会 聖隷学園で開催、2. 第57回小学校代表者研修会：キリスト教学校と道徳の教科化、3. 北海道ブロック研究集会、4. 関

西地区小中高聖書科研究会、5. 関東地区教職員後継者養成部会、6. 新任教職員のみなさまへ キリスト教学校教育同盟とは？、7. 浦和ルーテル学院浦和美園新校舎、8. キリスト教教育者物語⑦、9. キリスト教Q&A

「世の光 NO. 775」 (日本同盟基督教団)

1. 教団総会：恵第66回教団総会議長報告、2. 表彰：①信仰生活50年、②教会学校教師25年、③教会学校教師10年、3. 2015年人事異動表、4. 教職教育部：新任教師派遣直前研修会、5. 復興支援本部：「東日本大震災から4年を迎えての祈りの集い」報告、6. 宣教研究所：ローザンヌ運動と日本同盟基督教団の宣教、7. 寄稿：追悼 マクダニエル宣教師、◇ 国外宣教 NO. 458、1. たった数百円なのだけど、2. 人知を超えた主の計画、3. 海老名浩宣教師 退任にあたってのご挨拶、4. 宣教師近況・祈祷課題

「JHC Revival 798号」

(日本ホーリネス教団)

1. 次世代育成ー育つ喜び、育てる喜びー九州教区編、2. 新教団委員挨拶、3. ネヘミヤ・プロジェクト報告：神さまの思いの不思議さ、4. 宣教局ニュース：①国内宣教「兼牧支援制度」、②国外宣教：「宣教師のために祈って欲しいこと③」、4. 財務局だより、5. 私のおすすめ この一冊、6. ユースジャム2016、8. 教団本部ニュース

「イムヌエル教報 NO. 825」

(イムヌエル総合伝道団)

1. 創立記念年會を超えて 感謝と展望、2. ウェスレアン大会に主席して、3. 創立70周年記念企画「継承」回顧 教団創立の頃、4. 海外トピックス、5. 国内教会局から 伝道サポート・システム、6. 追憶 故深谷きみゑ先生、7. 世界宣教局：ザンビア、フィリピン、カンボジア、ケニア・テヌウェク、ボリビア、11. 聖宣神学院報、12. 公報・消息

「JCCJtimes NO. 749」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. ビジョン 2021、2. 協力教会制度、3. 教区総会報告(後編)：①北海道教区、②東北教

区、③兵庫教区、④中国教区、⑤九州教区、4. 第85回関西聖書神学校卒業式、5. 公告

「アッセンブリー News NO. 715」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き57、2. 献堂感謝：鎌倉大船キリスト教会、3. 特集 CBC卒業式、4. イースター特集、4. 映画館が叫ぶ、5. 教区聖会案内、6. 信徒が学ぶギリシャ語 第1回、7. 新・祈りのコラム⑫、8. 教区情報 vol.4 東海教区、9. 社会時報・第42号：平和をつくり出す教会ー社会問題とどう向き合うのかー

「JECA フォーラム NO. 94」

(日本福音キリスト教会連合)

1. 現地リポート 被災地では、今、2. 支援による岩手開拓伝道の経緯とこれから、3. 一般社団法人いっぽいっぽ岩手 設立経緯とこれから、4. ボランティア・リポート、5. 岩手に導かれて

「保守バプテスト NO. 199」

(保守バプテスト同盟)

1. 保証人となるイエス様のイースターの恵み、2. 気仙沼第一聖書バプテスト教会 新会堂完成の恵みと感謝、3. 新しい潮流「U-40河口キャンプ」報告、4. 新任・退任教職者紹介、5. 同盟ミニニュース、宣教団ミニニュース、神学校ミニニュース、キャンプミニニュース

5月

「教団新報 NO. 4821 5/30」

(日本基督教団)

1. 教区総会報告：大阪、九州、北海、四国、京都、2. 宣教研究所委員会、3. 救援対策本部会議、4. 事務局報

「聖公会新聞 NO. 717 5/25」

(日本聖公会)

1. サムエル北澤洋新執事誕生、2. 奈良基督教会 会堂と園舎 国の重要文化財に指定、3. テゼ共同体の創設者西端100周年を記念、4. ネパール大地震に支援を、5. マイケル・ラブスレー師

来日 聖公会神学院で講演会開催、6. 第23回聖公会女性フォーラムを開催、7. 各教区だより：九州、京都、東京、沖縄、大阪、横浜、中部、北海道、北関東

「世の光 NO. 776」 (日本同盟基督教団)

1. 信仰告白：教団信仰告白の解説その⑨、
2. 教会支援部：教会支援制度による恵み、
3. 教師試験委員会：2014年度教師試験 総評、
4. 宣教研究所：1974年「ローザンヌ世界伝道国際会議」思いで（前篇）、5. 信望愛：台所から神の家に～多磨教会50周年に寄せて～、6. 恵流：神さまの導きを確認して、7. 教会紹介：北赤羽キリスト教会、8. 献身の証し、◇ 国内宣教 NO. 177：①東北宣教プロジェクト NEWS NO. 3、②宣教区レベル開拓懇談会報告、③キャラバン隊員大募集、◇ 国外宣教 NO. 459：①アジア21宣教地視察報告（ミャンマー）、②台湾に生家を訪ねる旅、③アイワ語聖書翻訳、宣教師近況・祈祷課題

「キリスト教学校教育 NO. 683 5/15」 (キリスト教学校教育同盟)

1. 第59回事務職員夏期学校：主題「キリスト教学校で事務職員として働くとは？」、2. 理事長諮問による二つのプロジェクト委員会一次の世代の教育同盟を見すえてー：①「教育同盟の新しい連携」に関するプロジェクト委員会、②「道徳の教科化」に関するプロジェクト委員会、3. 関東地区小中高聖書科研究会、4. 関東地区教職員後継者養成部会、5. キリスト教教育者物語⑳、6. キリスト教Q&A

「イムマヌエル教報 NO. 826」 (イムマヌエル総合伝道団)

1. 教団創立70周年記念年会報告：恵に支えられた70年、2. 国内教会局から、3. 創立70周年記念全国青年大会：ALL JAPAN YOUTH CONFERENCE の総括、4. 追憶：故蔦田公義先生、5. 公報、◇ 広げた翼：世界宣教局、1. ポリビア、2. ケニア・テヌウェク、3. 台湾、◇ 聖宣神学院報、1. 神学エッセー：カリキュラムの目指すもの、2. 神学院に入学が許されて

「JHC Revival 799号」 (日本ホーリネス教団)

1. 次世代育成ー育つ喜び、育てる喜びー南西教区編、2. 2015年度 教区長挨拶、3. 2015年度施政方針（概略）、4. 第52回 教団総会報告、5. 委員長発信、6. 第67年会 年会講演：「魂の配慮としての牧会」、7. 宣教局ニュース：①国内宣教、②国外宣教、8. 追悼 故高木輝夫牧師を御国に送って、6. 教団本部ニュース

「JCCJ times NO. 750」 (日本イエス・キリスト教団 時報)

1. ビジョン2021、2. 協力教会制度、3. 第65回 教団総会、4. 2015年度局長挨拶、5. 関西聖書神学校入学式、6. 公報・消息

「アッセンブリー News NO. 716」 (日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き (58)、2. 特集 CBC入学式、3. 中央聖書神学校 (CBC) 掲示板、4. ペンテコステ特集：宣教における聖霊、5. イスラエル公認ガイドが教える穴場スポット⑤、6. 母の日特集、7. 新・祈りのコラム13、8. 教区情報 Vol. 5：北陸教区

「KINGDOM 第608号」 (基督聖協団)

1. 「成長しよう！」という希望、2. 新しい教会の建て上げ、3. 救いの証、4. 献身に導かれて、5. 永遠のいのちに至る食物のために、6. 本部耐震補強工事報告、7. お知らせ、報告

「東京ミッション研究所ニュース NO. 80」 (東京ミッション研究所)

1. 「TMR I が継承していく道」、2. 聖書的説教の一方法、レスポナント、3. 論説、4. TMR I からのお知らせ

6月

「教団新報 NO. 4822 6/20」 (日本基督教団)

1. 教区総会報告：沖縄、中部、西東京、西中国、兵庫、東海、2. 宣教委員会、3. 韓国・

台湾・スイス協約合同委員会、4. 伝道のともしび

「聖公会新聞 NO. 718 6/25」
(日本聖公会)

1. 謝罪を公表、「京都事件」について常置委員長名で、2. ラブスレー師が来日：聖アンデレ教会での説教、聖公会神学院での講演及び質疑応答、3. 各教区だより：横浜、北海道、東京、沖縄、神戸、大阪

「キリスト教学校教育 NO. 684 6/15」
(キリスト教学校教育同盟)

1. 2つの事務職員部会研修会：①中堅事務職員、②キリスト教活動担当、2. 座談会「キリスト教学校教員として歩き始めて」、3. キリスト教教育者物語29

「世の光 NO. 777」 (日本同盟基督教団)

1. 「教会と国家」委員会：2015年2・11信教の自由を守る東信州の集いに参加して、2. 宣教研究所：1974年「ローザンヌ世界伝道国際会議」思い出(後編)、3. 宣教区：東海東宣教区紹介、4. 教会紹介：岡山めぐみキリスト教会、5. 信望愛：宣教の主を見上げて一立って荒地へ、6. 教団ニュース、◇ となり人：社会厚生部だより第58号、1. 老後の満足度ととなり人、2. 教誨師＝特殊宣教、3. 防災訓練・危険度評価から見えてくるもの、4. 私の心とからだの健康法、5. 30年ぶり互助会費値上げ、◇ 国外宣教 NO460：1. 手を携えて、世界に～JOMA加入について～、2. プロジェクト3年の総括、3. 歴史に働く神に、4. 宣教師近況・祈祷課題、5. クリスマスホームビジョン、6. MBC夏キャンプニュース

「イムマヌエル教報 NO. 827」
(イムマヌエル総合伝道団)

1. 関西ユースステーション、2. 関東4教区合同女性大会、3. 教団運営委員会から：教師研修会のこと、4. 創立70周年記念企画「継承」：聖宣神学院創設期、5. 海外トピックス、6. 国内教会局から、7. 追憶：故古賀純子先生、8. 公報、◇ 広げた翼：世界宣教局、1. ザンビア、2. ケニア・テヌウェク、3. ボリビア、◇ 聖宣神学院報：1. 神学エッセー 行

って弟子としなさい、2. 神学院に入学が許されて、3. 私の神学生時代、4. 同窓生の近況、5. 神学院スタッフ－恵みの想起、6. 学苑だより

「JHC Revival 800号」
(日本ホーリネス教団)

1. 「視」～過去を、今を、未来を～、2. ネヘミヤプロジェクト、3. 宣教を考える、4. 温故知新：北海道教区の源流を尋ねて、5. 明日への種まき：北海道教区、6. 2015年度 新正教師・新補教師・新教師試補 紹介、7. 隠退者挨拶、8. 宣教局ニュース、9. 奉仕局だより、10. 教団本部ニュース

「JCCJtimes NO. 751」
(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. ビジョン2021、2. 協力教会制度、3. 2015年度教区長挨拶：①北海道教区、②東北教区、③関東教区、④信越教区、⑤京都教区、⑥大阪教区、⑦兵庫教区、⑧中国教区、⑨四国教区、⑩九州教区、4. 公報・消息、

「アッセンブリー News NO. 717」
(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き(59)、2. 吉野道子師の召天、3. 教区聖会レポート：①北海道教区、②関東北東教区、③東海教区、4. 中央聖書神学校通信科、5. 紹介：中央聖書神学校後援会からのお願い、6. 特集：父の日、7. 読者の投稿広場(3)、8. 新・祈りのコラム14、9. 教区情報 Vol.6：関西教区



キリスト教大学・神学校の ニュースから

4月

「日本聖書神学校 学報 第148号」

1. 2014年度 第67回卒業生、2. 2015年度 新入生一覧、3. 教職員の異動、4. 献身志願者の集い、5. 創立69周年記念日集会のご案内、6. 2015年度神学基礎講座のご案内、7. 国際理解センターから

「聖契神学校ニュース NO. 123」

1. 求道者、2. 年度末と年度始めに、3. 卒業生の証し、4. スクールレポート（入学生：正規生2名、聴講生9名）

5月

「東京基督教大学大学報 148号」

◇ 特集：シニアコース・社会人入学での学び
①. 社会経験を経てTCUで学ぶ、②. 教会からの声、③. 社会経験のある方がTCUで学ぶには、2. 神学科・大学院：教会への派遣、3. 教会音楽：粗油行・修了記念コンサート、4. 国際キリスト教学専攻：海外語学研修報告、5. キリスト教福祉学専攻：第4回ケアチャーチ講座を開催して、6. ニュース：2015年度学年暦、2015年度エクステンション、2015年度年間聖句と祈禱課題、「アクティブラーニング教室」と「グローバルラウンジ」、8. 卒業生からの手紙、9. 支援会ニュース、10. Information

「関西聖書神学校 NEWS Vol. 09」

1. 第85回卒業式、2. 卒業生・修業生の証、3. 2015年度 入学式、4. 後援会だより、5. 関西聖書神学校塩屋校舎開校85周年記念親睦会

「お茶の水聖書学院 NEWS 第42号」

1. 主と教会に仕える、2. 卒業生ご挨拶、3. 2015年度入学式、4. 学窓トピックス

6月

「聖書宣教会通信 161号」

1. 聖書神学舎から、2. 2015年度 新入会生、3. 2014年度 卒業生、4. 2015年度 聖書宣教会主要年鑑予定

「西南学院大学神学部報 52号」

1. 2014年度西南学院大学神学部・大学院神学研究科卒業礼拝説教、2. 2015年度 卒業予定者紹介、3. 2014年度 卒業生紹介、4. 2015年度 入学生、5. 書評、6. 2014年度開講科目表、7. 神学部報告、8. 2014年度 業績・活動・消息

各学術雑誌の記事から

「雲の柱 29」

（賀川豊彦記念 松沢資料館・2015）

1. ガイド「最後のノーベル平和賞推薦」、2. 協同組合社会—賀川豊彦の夢、3. コープこうべのたゆまなき挑戦、4. 賀川豊彦を「忘却」しない努力を、5. 新春鼎談 賀川豊彦と平和、6. 武内のおばさんのことなど、7. インタビュー 雲柱社とともに歩んだ六一年、8. 児童虐待防止と学習権の保障—賀川豊彦の実践に学ぶ、9. 賀川豊彦 復刻アーカイブズ ① 小説の作り方と読みかた、10. 新刊書籍の案内 Seeing All Things Whole ヘイスティングス、11. 読者の声をお寄せ下さい！

「基督教研究 第77巻 第1号」

（同志社大学神学部基督教研究会・2015.06）

[講演] ユダヤ教における「自由」—ヘブライ語聖書とラビ・ユダヤ教を中心に—

[論文] 1. パウロとガラテヤ人の信頼構築の内実 —「ガラテヤの信徒への手紙」3章15節、4章12-15節を中心に—、2. 自由主義クエーカーの源流 —J. スコットによる信仰の内面化—、3. 「教義なきキリスト教」か「新しい教義」か —オットードライヤーとユリウス・カフタンの論争に関する一考察—、4. 在日青年の苦悩 —1970年代における在日韓国留学生の逮捕と在日大韓基督教会の対応—

あとがき

2015年度最初の「日本宣教ニュース」をお届けできることを感謝いたします。

今回のJMRレポートは、「第5回 東日本宣教ネットワーク全体会議」での発題及び「地方開拓宣教セミナー」のレポートの抜粋を掲載いたしました。

住吉師、稲垣師の発題に共通して言えることは、福祉先行型宣教論とも言えるものです。今、被災地においては、このようなタイプの働きが様々なニーズに応える形で、様々な支援と共に宣教活動が展開されていると言えます。それは、福音伝道一本槍で突き進んできた旧来の伝道方式の再考を迫るものと言ってもよいのではないかと思います。

しかしながら住吉師は、同じ被災地でも宮城と福島では宣教の課題が異なると言っています。先行きにいくらかでも希望が見えている宮城と震災と共に原発の被害が重なり、複雑な様相を帯びている福島では、先行きに希望が見えず、生活苦も相まって自殺者も多く出ているのが実状です。そこにおいては、より弱者と共に歩む姿勢、共に重荷を担う教会のあり方が求められている、とされています。

このことは稲垣師の発題でも言われているように、「弱い部分を含むキリストのからだなる教会」全体の問題として、福島の教会だけが負うのではなく、元気な強い部分の教会が、いかにカバーしていくかが問われている、とも言えるのではないのでしょうか。

「地方開拓宣教セミナー」のレポートで、「日本に教会がない地域は、全部人口が5万人以下の地方で1,800ヶ所ある。」と述べていますが、これは、平成の市町村合併前の数字です。現在は、26市(1区含む)、527町村が教会未設置となり、教会がない地域は、表面的な数字の上では減少しているかのような印象を与えかねません。

RJCPN(日本地方宣教ネットワーク)では今でも合併前の地図を用いて、この1,800町村を覚え、そこでの開拓伝道を目指した祈りと地道な働きを継続されています。このような姿勢は、日本の教会も大いに学ばなければならない大事な点ではないのでしょうか。

(初穂)



日本宣教リサーチ調査報告会

教会インフォメーションサービス (CIS) の働きを引き継ぎ、日本宣教の基礎的研究を行うことになった日本宣教リサーチ (JMR) は、発足から 1 周年を迎えることができました。この間、皆様からいただいたご支援を心から感謝いたします。

つきましては、この度、皆様のご支援に感謝して、下記のような調査報告会を開催することといたしました。皆様に、初年度の調査活動の成果をご報告すると共に、今後日本宣教リサーチが、日本宣教のパラダイム転換に少しでも寄与していけるように、また、さらにより良い活動が展開できるように、皆様から今後の活動に対するご意見や、ご要望等をお聞きしたいと願っていますので、是非ご参加くださるよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、初年度の調査活動の成果としては、次の 2 点をご報告させていただきます。

1. 2013 年度全国キリスト教会の教勢
2. 来日宣教師の実態調査



発題者：柴田初男

国際宣教センター日本宣教リサーチ専門委員

発題者：花蘭征夫

国際宣教センター日本宣教リサーチ専門委員



2015 年 **11/2** (月) 13:00 - 15:30

会場：東京基督教大学国際宣教センター

お問合せ・お申込み

資料代	1,000 円
申込内容	①氏名 ②電話 ③E-mail ④所属教団・教会名
申込み先	E-mail : fcc@tci.ac.jp FAX:0476-31-5521
申込締切	10月21日(水)
連絡先	0476-31-5522



申込み者には、事前に、2015 年 4 月に発行された「年次レポート」を送付いたします。レポートを読んで、報告会におのぞみください。

日本宣教リサーチ発足1年を迎えて

教会インフォメーションサービス（CIS）の働きを引き継ぎ、日本宣教の基礎的研究を行うことになった日本宣教リサーチ（JMR）は、発足から1周年を迎えることができました。CISの支援者が継続してJMRをご支援下さったこと、新しい支援者も加えられたことを感謝いたします。そして、この働きへの期待の大きさを知り、身の引き締まる思いです。

この20年、日本の教会の様相は大きく変化しました。グローバル化の中で在日外国人教会の増加、在外信徒や求道者の帰国、韓国系教会・単立・インターナショナル教会の増加、聖霊派の影響、都市と地方の格差、教会の統廃合など。その中で、まず教勢データの充実した集積が必要です。宣教協力や新たな宣教方針、地域に根ざす教会の形成や文化脈化の理念の検討が求められている中、JMRが少しでも貢献できればと願っています。

2015年度は、東日本大震災被災地における「震災と信仰」調査プロジェクトを実施します。これは、震災を記録すると共に、これからの日本宣教のあり方を被災地の取り組みから学ぼうとするものです。2年目の日本宣教リサーチにどうぞご期待くださり、更なるご支援をお願いいたします。

【賛助会員】「日本宣教リサーチ」の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) 特別賛助会員：趣旨に賛同し、支援して下さる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円（何口でも）
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催をご案内します。
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」を提供します。
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート（詳細篇）を提供します。
- (2) 一般賛助会員：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円（何口でも）
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催をご案内します。
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」を提供します。
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート（概要編）を提供します

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

TCU への寄付金（献金）は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金（献金）額の約 50% となります。

（詳しくは、☎0476-46-1131「TCU 募金係」までお尋ねください）。

郵便振替口座：00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、本学発行の振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。（振替用紙がお手元ない場合はこちらよりお送りいたします。）



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ 【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL：0476-31-5522 FAX：0476-31-5521 E-mail：jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一（東京基督教大学大学院神学研究科委員長）
日本宣教リサーチ専門委員 柴田 初男、花蘭 征夫